

太平洋の森から

2019年3月発行
No. 40

自然とともに暮らす人びとの優しさと…
水と森の現状を訪ねて
パプアニューギニア、ソロモン諸島、フィジーへ



移動製材機で村の収入を助けているポール・パゴロさん

伐採企業と闘いつづけている
ムー村の人々



深い原生林からの滝（マラクル村のワラカラップ）

パプアニューギニア、ソロモン諸島、フィジー 自然とともに暮らす人びとの優しさと… 水と森の現状を訪ねて

2018年10月20日～11月24日

参加者：清水靖子・倉川秀明・池田英生

私たちの会は25年目を迎えました

代表 辻垣正彦

「パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会」は、1994年にカトリック藤沢教会で結成されました。結成記念講演会は大場信義氏の「パプアニューギニアの神秘・ホタルの樹」でした。それから25年「森を守る」の活動は続いております。

会員の皆さまのサポートがあればこそ続けていくことができました。深くお礼申し上げます。

グローバリゼーションの波は大きなうねりとなり、先進国の横暴による森の乱伐、資源の搾取、権力の横暴と独断は、国と国を孤立させるだけでなく、人々を疑心暗鬼にさせています。

森さえあれば自然災害にも立ち向かえるし、水や食料や薬にも不足はなく生活ができます。私たち人間にとって、またすべての生きものにとって、森は全き恵みであることを、私たちはこの間、深く目覚めさせていただいてまいりました。

ニューブリテン島の原生林の村々。特にマラクルやタボロの村人たちの生きざま、子供たちの笑顔と輝くような目、森をベースとした生活、それらは自然との共棲が、どのようなものであるかを私たちに教えてくれます。天からの恵みの原形が原生林に村々に輝いています。

一方でグローバリゼーションの大波は、この小さな村々にも一層強く押し寄せて来ています。

今回は、2018年10月20日～11月24日に、会の柱であるメルセス女子修道会の清水靖子と倉川秀明と池田英生の3人が現地調査に出かけました。

倉川秀明はかつて、教育専門家としてパプアニューギニアにJICAから派遣され、その後JVC（日本国際ボランティアセンター）の職員となり、海外での災害援助や農村開発にたずさわりました。現在は有機農場を自営し、会の事務局長でもあります。

池田英夫は建築を専攻する大学4年生。環境問題に強い関心を持ち、卒論の大切な時間を割いて参加しました。

今回の訪問時は、ちょうどAPECの閣僚・首脳会議と重なり、交通手段その他が乱れるなか、3人は小さな舟で外海を10時間も漂った厳しい調査旅行をつづけました。本当にご苦労さまでした。よくぞ無事で帰ってこられたという思いです。それだけに現地での交流は熱いものがあったでしょう。

ソロモン諸島を襲った津波被害の、その後の復興はどうだったか。

フィジーでの森の現状、ニューアイルランド島の状況はどうだったのか。

2017年に訪日したポール・パボロさんと、その村々はどうなのか。

今回も盛りだくさんのテーマであり調査報告です。

APEC “台風” の谷間で

清水靖子

パプアニューギニアの首都ではAPEC（アジア太平洋経済協力）閣僚・首脳会議が、2018年11月14日から18日に開催されていた。私たちの小さな旅は、そのAPEC “台風” にさらされながら、森を守る村々の人びとへの連帯の旅をつづけました。

“貧富の差は拡大する一方で、医療と教育への政府サービスは不足。小児麻痺、マラリア、肺結核、感染症が蔓延しているなかで、政府はAPECの来賓のために40台もの高級外国車を輸入したのだよ。全人口の5%が首都に住んでいるが、富の恩恵は首都の富裕層に、搾取は貧しい人々から”という様々な怒りの声がメディアに投稿されていた。

鉱産資源・森林資源目当ての外国勢も群がってくる



以下のフェイスブック (<https://www.facebook.com/bryan.kramer>) からその乱入後の議事堂内の一部を見ることができる。動画の投稿者はマダン出身の議会議員ブライアン・クラメル氏。

(日本も含めて)。APECの威光を背に、私腹を肥やす政治家・企業、特に首相のピーター・オネイル、APEC担当大臣たちへの批判がつづいていた。

当然のことながら、政府側も膨大な治安部隊を召集した。その警戒はすさまじいものだった。

反動として多様な抗議行動も起こり、バスの運転手たちによるストライキさえもあった。

しかし何よりも思いがけない事件は、その治安部隊そのものが反旗を翻したことだった。それは11月20日に起こった。

最後の首脳会議(11月17～18日)が終わった20日に、首都を警備していた重装備の治安部隊のメンバー多数が、国会議事堂を襲い、窓ガラスや椅子、器物破損行動を行った事件であった。

「APECの金はどこに行ったのか。APECのために高級外車まで買った政府が、この間の警備に全力を尽くした私たちに、なんらの賃金も支払わないのは不当だ」との怒りと要求だった。

私たち「パプアの森を守る会」の3人は、そうしたAPECが席卷する“台風”の谷間で、APECゆえにキャンセルされた飛行便の代わりに、全身ずぶぬれの雨中10時間の小舟（ボート）の旅をつづけることになった。寒くてもいい。凍えてもいい。ただひたすら原生林の村々と優しい人びとに出会うために……。それは忘れることができない旅となった!!



雨中10時間の旅をするようになったボートの発着場（ラバウル港）

パプアニューギニア 自然とともに生きる人々を訪ねて

訪問日程：2018年11月13日（火）～24日（土）

倉川秀明

一昨年（2017年）ニューブリテン島の森の中にあるムー村からポール・パボロさんが来日して、各地で報告会を行ない、企業によって原生林が伐採され、生活もままならない現状に対して、道路封鎖などの行動を起こすとともに、裁判によって操業一時差し止めを勝ち取ったという話を聞いた。そこで、私もその現場と村人たちが自然とともにどのように暮らしているのかをこの目で見たくなり、現地を訪ねることにした。

11月13日（火）に私と池田英生さんの2人は羽田空港を発ち、マニラ経由で14日（水）朝にポートモレスビーに到着、その午後にラバウルへ行き、清水靖子さんと合流した。ラバウルでは、市内のココポという町にあるカトリック教会でポール・コテ神父のご好意で、敷地内にある神父のご自宅に泊めていただくことになった。

11月15日（木）ラバウル

ポール神父が私たち3人を車で、教会の背後の丘を経由してラバウルの町まで連れて行ってくださった。

丘の上には、トマ小学校とトマ教会があり、近くの展望台からは、山の中の焼き畑でよく作物が栽培されているのが見てとれた。この地域では主食はバナナで、キャッサバもよく食べるそうだ。

ラバウルは、湾岸の火山が1994年に噴火して、町が火山灰に埋まり大きな被害を受けたと聞いていたが、かなり復興していて、普通の市民生活はできていた。ただ、火山灰の残りが風に舞って埃っぽい。

昼食後、市場へ行って、見学する。多様な種類の作物がたくさん並んでいて、とても豊かであることがわかる。バナナ、クッキングバナナ、サツマイモ、タロイモ、ピンク色の細長いタロ（シンガポー）、各種のマメ類、アボガド、パパイヤ、ココナッツ、巨大なパンの実、ヒメリンゴに似た果物ラウラウ、空芯菜などの各種の葉物など、どれもみずみずしくおいしそうだ。また、細長いゆで卵があったが、それはマガポットという鳥の卵で、ラバウルの火山の麓の浜辺で砂の中に





パンの実を売る女性たち（ラバウルの市場にて）

卵を産み、地熱を利用して温めて孵化させるという習性をもっているという。

夕方になって、ノベルト・パメスさんに清水さんとともに会い、ノベルトさんが代表をしているマラナ地域の裁判に参加するための交通費への支援をする。

この日も、ポール神父の自宅に泊めていただく。

11月16日（金）マラクル村への飛行機飛ばず

今日は、目指す第一の目的地マラクル村へ行く予定だ。現地の航空会社トロピック・エアーの8:00の飛行機でジャキノット空港へ行き、その後ボートでマラクル村へ行く予定だった。そのため、7:00にトクア空港へ行き、搭乗を待っていたが、一向に搭乗手続きが始まらない。トロピック・エアーの窓口も閉まったままだ。事務所に電話を入れても誰も出ない。窓口は何の表示もない。ニューギニア航空の職員に聞いても、知らないと言う。彼らの一人が、窓口が空いていないのだから今日、飛行機は飛ばないだろうと言う。色々聞いてみると、ちょうど今週中にAPECの首脳会議がポートモレスビーで行われており、それを記念してこの日が休日に急ぎょ決まったとのことで、そのため飛行機が飛ばないのだろうということだった。

結局9:00まで待ってらちがあかないので、家に戻らざるを得なかった。ポール神父との話し合いの結果、ボートをチャーターして、ボートでマラクル村へ行く以外に方法がないということになり、午後船着場へ行ってボートを探すことになった。

私と池田さんは、ボートの件の連絡を待ちながら、近くのスーパーマーケットへ昼食を買いに行ったところ、なんと店内で「ラバウル小唄」が日本語で流れて

いた。この歌は、第2次世界大戦中に日本軍がラバウルに軍事拠点を作って多くの日本兵がいたときに作られて兵士に歌われていた軍歌で、戦後の日本国内でもよく歌われていて、戦後生まれの私も覚えている。ラバウルの人々はこの歌の意味がわかっているのだろうか、店は単なる流行歌として流しているのだろうか、首を傾げた。

夕方になって、神父がボートをチャーターしたと知らせに来てくれて、すぐに皆で浜に出かけ、ボートを確認し、持ち主の漁師に話をして、明朝早くに出発することになり、まずボートの燃料代を支払った。ボートの運転手は、ブーゲンビル島出身の若者アイザックさん。

11月17日（土）マラクル村を目指す舟の旅

朝6:00に浜を出る。私たち3人のほか、運転手のアイザックさんとあと2人が補助で乗り込んだ。ヤマハのモーターが付いているだけの小型の漁船だ。

初めの湾内の海は穏やかで、夜明けの空は晴れ間もあって、2つの火山がくっきりとそそり立っている。

しかし、外海に出ると、様相が一変する。波が高くなり、船は激しく上下するようになる。体も上下左右に揺られて、あちこちに痛みが走り始める。雨も断続的に降ってきて、雨と波の飛沫で、体中ずぶぬれになり、風に当たって寒い。ひたすら耐える。

3時間後途中のワイドベイの入り口にあるノンギアという浜で15分ほど休憩をとる。この場所は、行程の約半分だというので、あと3時間ぐらいの辛抱かと考える。

そこを出ると、風雨は同じように体に当たり、ボートは激しく上下を繰り返す。ワイドベイの入り口をまっすぐ横断して岬を越えればマラクル村のはずだが、舟は湾のはるか沖へと大きく迂回して、岸が見えなくなる。一体どこを航行しているのか、いつまでこれが続くのか、さっぱりわからないまま、ひたすら耐えて6時間半、16:00によくマラクル村に到着する。全部で10時間の過酷な船旅だった。

岸边には、村人がたくさん迎えに来てくれて、歓迎されるが、体がよれよれで寒さでこわばっていて、うまく動けない。皆さんが私たちの荷物も持ってくれて、この村出身のポール神父の村の自宅に案内され、

そこで落ち着くことができた。

まもなく、夕食を出していただき、アイピカという葉と缶詰の魚の温かいココナッツスープと白米がとてもおいしかった。フラワー（小麦）という名の揚げパンに焼きいも（カウカウ）も絶品だ。感謝に堪えない。

この小屋は、ポール神父のいとこのスティーブンさんが管理し、アグネスという若い女性が食事や身の回りの世話などをしてくれた。ジャスティンさんは大工であり技術者で、この家と外のシャワー室を建てたという。

この夜は、とにかく無事に村に着くことができた安堵で、ぐっすり寝入った。

11月18日（日）マラクル村

夜明けごろ、家の付近を散歩していると、ポール神父の実兄ガブリエルさんに出会う。

彼によれば、家の前の少し広目の道がこの村のメインロードで、村の中を通っていて、台地の上の道に通じている。この道は、第2次世界大戦中に日本軍が作った道だという。このニューブリテン島の南岸に沿ってラバウルから西の端まで道を作った。それを私たちは今でも使っているのだと語っていた。ここでも戦時

中に戦闘があったのかと聞いたら、オーストラリア軍は日本軍が来る前に逃げて戦闘はなかったとのことだった。

この日は日曜日だったので、朝の8時から1時間礼拝があり、私たちも参加した。家からメインロードを東にしばらく行くと、エイド・ポストという小さな医療施設がある。ただし、ここには医者や看護婦はいない。医薬品も不足しているという。その小屋の前の道を右手の浜の方に折れると、小学校の教師の宿舎があり、その奥に小学校がある。さらに砂浜に近い広場に教会が立っている。

マラクル教会は、かつてアイリッシュの宣教師がこの場所に最初に上陸して、教会を建てたのが起源だそう。今の教会は3度目に建て替えたもので、地元の木材を使って、壁に自分たちで絵を描いたのだという。

礼拝の後、私と池田さんは、村にある泉を見に行く。まず家に戻り、さらにメインロードを西へ少し行くと、池のようなところになる。森が切れた地面の下のあちこちから豊富な水が湧き出ている。その水が池となり、川となって海岸に流れ込んでいる。最初の泉が湧き出ているところが男性専用である。さらに下流に最大の泉が湧いているところがあり、そこが女性と子供専用



の場所だと決まっているとのこと。そこで女たちが水汲みし、食器を洗い、体を洗っていた。

さらに私たちは、ガブリエルさんとスティーブンさんの案内で、浜沿いの道を30分ほど歩く。砂浜の所々から水が湧き出して海に流れ込んでいる。背後の森がいかにも深く、いかに保水力があるかをこの光景が如実に示している。

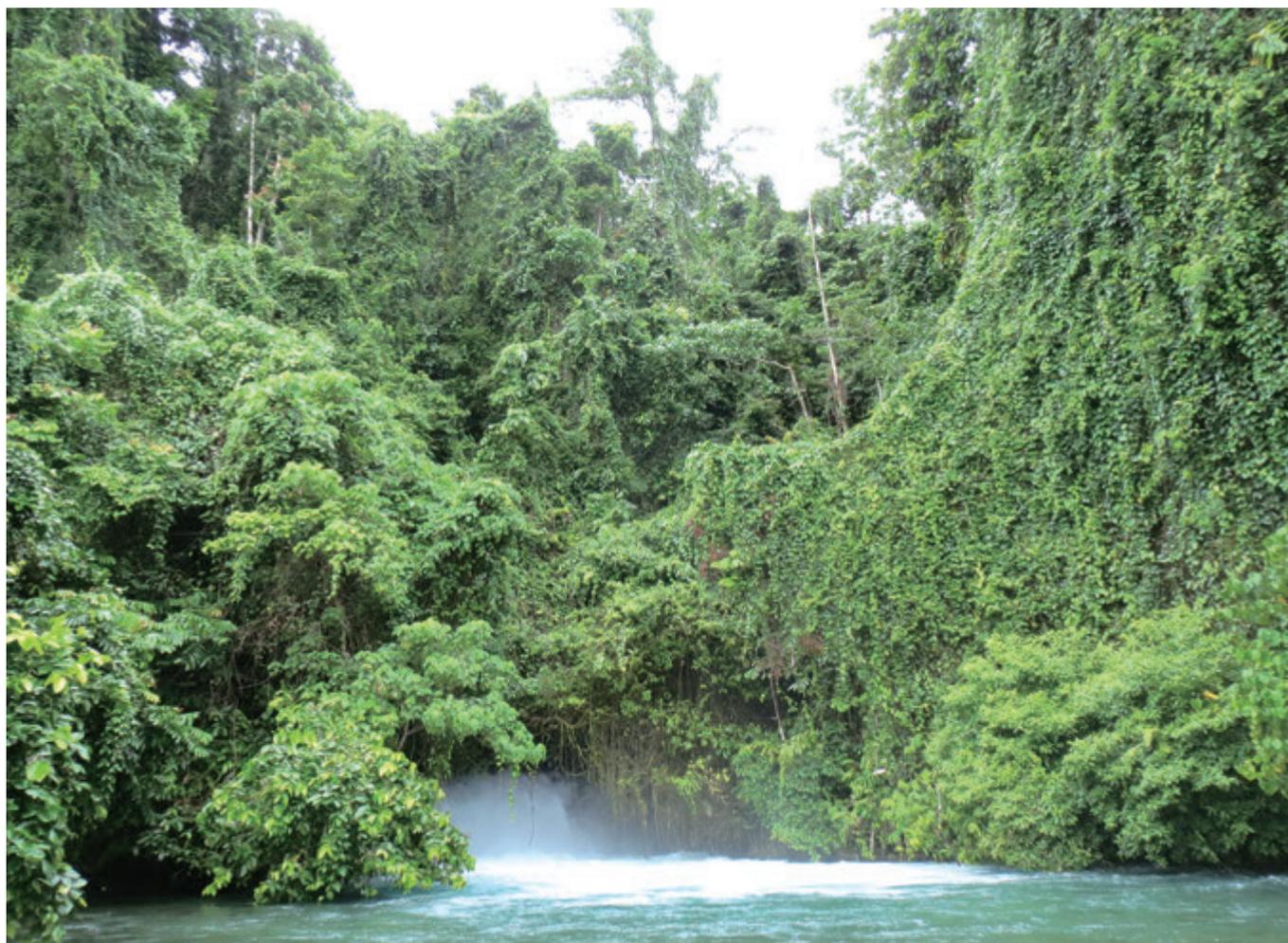
やがて、ついに滝の泉に出る。ワラカラップの滝と呼ばれていて、奥の茂みから莫大な量の湧水が吹き出していて、まさに滝のようだ。吹き出し口の奥に洞穴があり、その洞穴の出口から水が噴き出しているとのことだ。

その水は透明で冷たい。その湧水が池をなし、太い川となって海に注いでいる。川底には小さなハゼのような魚と平たい小さな鯛のような魚がたくさん泳いでいる。

ガブリエルさんによると、この泉の近くの岸边にはさらに3つの大きな泉があり、いずれも川を作って浜



マラクル村の少年たち



ワラカラップの滝

に注いでいるという。

彼は往復の道中で雄弁にかつ論理的に私たちに語る。かつて、マラクル村にマレーシアの会社（リンブナン・ヒジャウ社のこと）が来て、木材を切り出したと言ったが、我々ははっきりNOと言ってサインをしなかった。伐採業者は、木を切って売り、オイルパームのプランテーションにすればお金が手に入ると言ったが、それは違う。伝統的な方法で自然を残し、自然を利用して生きていけば、我々は生きていける。すばらしい環境、自然こそが最も大切なのだ。しかし、若い人たちは西洋の考え方が頭に入って、考え方が変わってしまい、伝統的な暮らし方を忘れてしまっている。しかし、このすばらしい自然を守って、観光の目玉にすれば、たくさんの人々がここに来るだろう。森を切ってオイルパーム・プランテーションにすれば、私たちにとっては何も残らないし、何の利用価値もなくなる。自然が保たれて、色々な生き物や植物が育っているからいいのだ。西洋のクリニックを建てても、薬がなければ役に立たない。一方、私たちは自然に生えている薬草を使って病気を治すことを知っているが、その方法を知っているのは年寄りばかりになってしまった。

帰る途中で台地に登り、ポール神父のもう一人の実兄で78歳になるジョン・コテさんの家を訪ね、歓談することができた。かくしゃくとした老人という印象だった。この台地は石灰岩が隆起してできており、その道は日本軍が作ったというメインロードで、戦後政府が作った道はまもなくすたれてしまったが、この道はしっかりしていて、今でも使っているとのことだった。

また、彼によると、村の人口はよくわからないが約3000人で、18の種族、7つの集落があり、人口は増えているので、新しい家を次々に建てているとのことだ（村全体の人口は誰に聞いても知らないとのことだったが、人々の話を総合すると1300～1400人ぐらいだと推測できる）。

午後はずっと激しい雨が降り続いたので、外出できなかった。この時期、この地域は乾期で例年は雨が降らないのだが、今年の雨は異常だという。村に来るときに濡れた服が少しも乾かない。

11月19日（月）ム一村

今日は第2の目的地ム一村のポール・パボロさんを訪ねる予定だ。

7:00にボートで浜を出発し、ジャキノット湾西岸にありこの地域の行政の中心地であるパルマルマルに行き、ロッジを経営するイギー・マタピアさんに会う。彼はマラクル出身で、森林伐採に断固反対している。ラバウル教区内での伐採問題に関する話し合いの、ウヌシゲテ地域（マラクル村を含む）の代表に選ばれている。

マングローブの林の中の細い水路をボートで抜けると、彼のロッジに通じる浜に出る。私たちの帰りの飛行機便のチケットを購入してくれるよう依頼する。

ジャキノット湾の西端の岬を回り込んで、9:15にム一村に到着した。果たしてポールさんはいるのか、私たちが訪ねることを知っているのか。案の定、ポールさんは村におらず、奥地に木を切りに行っているという。電話やメールが通じないので、私たちが来ることも知らないようだった。

彼を呼びに行ってもらい、私たちはしばらく彼の姉の家の軒下で休憩する。ポールさんの奥さんのジャネットさん、娘さんのグレイスさん、一昨年ポールさんが来日する直前に産まれた双子の赤ちゃんたちと村人たちが歓迎してくれた。

まもなくしてポールさんが戻ってきて、私たちが来たことに驚いた様子だったが、去年東京で会ったので再会を喜びあった。

昼食後、村の前の川の対岸にある伐採会社ギルフォード社（リンブナン・ヒジャウ社傘下）による原木積み出し港と操業拠点のドリーナ・キャンプに行く。

ポールさんは、ギルフォード社があまりに腹立たしいので行く気にもなれないとのことで、私たちだけで



ドリーナ・キャンプを視察

行く。

キャンプの入り口には平たい船を横付けして栈橋代わりにしてある。その横の浜辺にボートを上陸させる。樹木が切り払われて何もない広大な敷地に大きなダンプカー、トラクター、コンクリートミキサー車などが並べられ、事務棟や自動車修理工場のような建物が並んでいる。その背後は労働者の住居地区だという。は

るか向こうには大きなタンクが見えた。パームオイルの貯蔵タンクだそうで、奥地のオイルパーム・プランテーションから集めたパームオイルを、地下のパイプを通してこのタンクに運び、いったん貯蔵しておく。搬出するときには、栈橋に停泊する船に地下パイプで注入するのだそうだ。

私たちが写真やビデオをとっていると、会社の社員



ポール・パボロさんたちの木材事業の現場で——
移動式製材機のレールを敷く



材木置き場、周囲の木々を切らずに残している



切り倒した大木を製材する

が近づいてきて、何をしているか、どこの国の人かと聞く。日本人でただ様子を眺めているだけだと答えると、写真を撮るなどと言う。あなたはどこの国の人かと聞くと、チャイニーズだと答えた。これ以上長居は無用と、早々にボートに乗り、ムー村に戻る。

村でポールさんをボートに乗せて、彼が先ほどまでいた彼の木材製造事業の現場を視察に行く。村の前に大きな川が流れているのだが、その水は濁っていて、ほとんど見通せない。海も川も水が澄み切っているこの地域で、濁った水というのは異様だ。ポールさんによれば、川の対岸の広大な地域の森がすでに伐採され、オイルパーム・プランテーションになっているので、化学肥料や農薬などの化学薬品が大量に撒かれて、それらが川に流れ込んで水が濁ってしまった。ビニール袋やオイルのプラスチックタンクも大量に流されて、マングローブの根に絡みついている。魚も捕れなくなったし、マングローブ林の土に住むカニ（マッドクラブ）もいなくなってしまうと説明してくれた。

見事に広がるマングローブ林の中の細い水路を深く入って行くと、ポールさんが行っている小規模製材の現場に着く。足元が悪いので、私だけがポールさんに付いて森の中に入って行った。わずかに広げた場所に材木が整然と積み上げられていて、これがこのプロジェクトで作上げた材木だという。さらに木立をぬって入って行くと、移動式製材機（Walkabout Sawmill）が置いてあり、これをどう使うか試しに行ってみると言う。その場に控えていた若者3人と一緒に、レールを敷き、組み立てて、そのレールに大きな円形のこぎりとエンジンの付いた伐採機を載せて、それでレールの上を移動させながら倒した木を少しずつ切っていくのが分かった。伐採して倒した40mもある太い樹を6mずつ切り、さらにそれを少しずつ切って材木にしていく。大木だけを切り、他の木は残す。伐った後は、植樹してまた育てる。良質な木として、マラス、ヴァイテックス、クイラなどがあり、どれも高さ50～60mぐらいの大木で、硬くて変形しない。家具や住宅などに使われる。政府は輸出を禁止している。実際に周囲にあるそれらの木を見つけては説明してくれた。同じ場所に、それらの良質な大木が立っているという

信じられないほどの素晴らしい森である。その森を破壊せずに、選択的に木を伐ることで、森を保存しながら、小規模に製材することができるというポールさんの工夫に感心させられた。

彼はプロジェクトとして、パルマルマル（前述のジャキノット湾西岸のポミオ地域の行政の中心地）で、学校の教室18室を建てるための木材を提供する事業を請け負って、製材事業を進めている。来週終了する予定だという。木材は近くの海岸からトラックで丘の上の道を通って持っていく。オーストラリアの基金から資金が提供されるそうだ。代金は終了してから受け取ることになっている。この収入は、村人を助け、さらに裁判費用に使うつもりだという。

村には同じ移動式製材機が全部で4台あって、これからも製材事業を請け負うことで、収入源としていきたいと話す。外からの資金援助を期待するのではなく、自分で工夫して収入の方策を見つけていくというポールさんの姿勢は素晴らしいと感動した。

この日は、ムー村に宿泊。

11月20日（火）マラクル村

早朝、朝食後に村人とミーティングを開き、私たちが挨拶した。そして、ポールさんに裁判に参加するための交通費支援金を渡す。お土産として、ソーラーライト2つ、ソーラーランタン1つ、サッカーボール、守る会のニューズレター3号分10冊を贈呈した。ニューズレターには、この村人たちの写真が載っているので、皆争って写真をのぞき込んでいた。ポールさんと村人たちの裁判を、日本の多くの人びとが支援していることを、村人たちは実感してくれた。村人は自分たちが決して孤立しているのではないことを知ってくることが大切である。

また村人は、清水さんの今回の訪問が最後の訪問になると知って、感謝のしるしとして、清水さんにブライド・プライス（結婚のときに男性が女性に贈るもの）として貴重な伝統の貝の首飾りを贈呈してくれた。

11時にマラクル村に戻る。昼食後、私と池田さんはスティーブンさんの案内で、背後の丘の上の集落を訪ねる。急峻で滑りやすい道を登っていくと、ガヴァレ集落に着く。私たち外国人が珍しいのか、子供たちが



ガヴァレ集落の子どもたち

たくさん集まってきて、たちまち取り囲んでしまった。私たちが歩くと皆付いてくるので、集団が移動するような状態だ。どの子どもあどけない澄んだ目をしていて、屈託なく笑う。皆が私たちに触りたがって、手で身体を突いたり、手に触れたりしてくる。握手してあげると、はにかんで笑う様子が何ともかわいい。人懐っこい子と手をつなぎながら歩く。

集落には、必ず中心となる場所に“少年の家”（現地語でハウス・ボーイとか、メンズ・ハウスと呼ばれ、男子が大人になる前に集まり、大人の男性から男としての役割や規律を学ぶ）が建っている。その周りに伝統的な家（高床式ではなくて、地面に直接建ててある）が並ぶ。檳榔樹の木が必ず植えてある。

続いて、パロレ、ピガプナ、クァタルプナ集落を歩く。それぞれの集落は小川を境に隣り合っている。丘の中腹にあるので、どの集落もそれほど広くはない。周りは深い森に囲まれている。こうした集落で村人は肩を寄せ合うように暮らしている。自然とともに生きることのつつましくも頼もしい様子が見てとれる。

一度下の家まで坂道を下り、次に海岸沿いにマラク



マラクル集落の少年の家

ル集落、マラオプナ集落、小学校などを訪ねる。マラクル集落は、ここマラクル村の起源となる集落で、1938年頃に島の北側から山を越えて移り住んだとのことだ。この集落には立派な“少年の家”や、崖の上に大木のある展望台がある。

集落を抜けると小学校の教師の家が並んでいる。17

人の教師がいるそうだ。小学校は、2001年から2008年にかけて建てられ、4棟の教室があり、生徒は約200人いるそうだ。中学校はここにはないので、パルマルマルへまで行かなければならない。道の途中にはカカオ豆を発酵、乾燥させる装置がある。

夜にメインロードを歩いて、ホタルの木を探しに行くと、あった。ホタルが一本の木に集まり、一斉に光を点滅させている。神秘的な光景だ。スティーブンさんが、ホタルが一番たくさん集まるのは午前3時ごろだと言うので、3時に起きてもう一度見に行く。しかし、残念ながら小雨が降ったようで、ホタルの数はそれほど多くなかった。

11月21日(水) マラクル村の集落巡り

今日は丘の上の最も高い所にある集落を訪ねる。早朝に出発し、海岸沿いのメインロードを東へしばらく歩き、分岐点から山道を登る。45分ほど登ると、ルーライ集落に着いた。小さい広場に面して古い“少年の家”がある。どの家も地面の上に直接建てられた伝統的な民家だ。

ピーター・パヴォグさんと会う。ピーターさんは、山の畑に行っていたが、わざわざ来てくれた。彼は、森林の伐採には明確に反対だと言った。それは森林の破壊であり、自然を守らなければいけないと。この集落では、その代わりに、62人の農家が1997年からカカ



ピーター・パヴォグさん(左から2人目)

オ栽培をしていて、年間62～70袋の収穫がある。しかし、木が古くなってきて、収穫が減っている。新しい苗を植える必要があり、支援が必要だとのことだ。また、集落には4つの乾燥装置があるが、これも古くなってきている。カカオ豆の運送費も負担になる。それらの支援を検討してほしいと語った。

その後、いったん下のメインロードに戻って、さらに東へ向かい、村の最も東にあるバイン集落を訪ねる。集落の管轄官であるウィリアム・ソラルさんと会い、集落を案内してもらった。この人口は50世帯、300人だそうだ。集落の端にはリトニ川があり、上流は泉で、水は澄んできれいだ。婦人たちが食器を洗っている。この水で顔を洗って、リフレッシュする。この海岸の先には大きな洞窟があり、伝説ではそこから人が出てきてポミオ(東海岸にある行政府のある町)に住み着いたのが我々の祖先だという。少し沖の海底には戦時中に撃墜されたオーストラリア軍の飛行機が沈んでいるそうだ。

家に戻って昼食をとる。今日はたまたま「子どもの日」だそうで、午後に広場で子供たちのグループが伝統的衣装を着てかわいらしい踊りを披露すると、むしろ周りの大人たちの方が歓声を上げて大騒ぎをしていた。

11月22日(木) ラバウル

今日はラバウルに戻る日だ。早朝にスティーブンさんのカカオ畑を見学する。彼も1997年から730本のカカオの木を植えたが、古くなって収穫が落ちている、新しい苗に植えかえる必要があると語った。

6:30にマラクル村を出て、ポートでパルマルマルに着き、イギーさんに会う。その後、近くにあるジャキノット空港からトロピック・エアーの午前中の飛行機でラバウルへ戻る手はずである。

しかし、ジャキノット空港のエージェントが来て、飛行機が満席だから乗れない、その代わりに午後1時にラバウルから要人の遺体を別の飛行機が運んで来るので、その帰りの便に乗れると言う。私たちは事前にリコンファームもして料金も支払っているのに、どうして乗れないのかと詰め寄るが、料金を受け取ったのが遅かったとの理由で、仕方ないとの一点張りだ。やむ

を得ず午後便に乗ることにする。それまでの時間は、思いがけず清水さんの旧知と出会い、コキ・ゲストハウスでゆっくり休憩させてもらう。

休憩後に空港に行って、本来乗れるはずだった便をむなしく見送り、次の飛行機の到着を待つ。午後1時に飛行機が到着し、要人の棺を下ろし、私たちが乗る段になって、リンブナン・ヒジャウの社員が、私たちが指して、あの人たちは3日前にドリーナ・キャンプで写真を撮っていたから、飛行機に乗せるなど、ジャキノット空港のエージェントに迫ったという。実はこのトロピック・エアーはリンブナン・ヒジャウの子会社なのである。しかし、地元出身のエージェントは、「料金を支払った客は平等だ」と言って、その要求を撥ね退け、私たちが飛行機に乗せてくれた。日ごろ伐採業者に使われていて不満を抱えていたに相違ないエージェントは、現地出身者の意地を見せてくれた。感謝したい。それにしても、もしこの飛行機に乗れなければ、週に2便しかないこの路線では、次の飛行機は3日後になり、日本に帰れなくなるところだった。往復ともにこのトラブル！ APECと伐採業者の影が、旅行者にもものしかかる現実をまざまざと体験した。

11月23日(金) ポートモレスビー

早朝にラバウルからポートモレスビーに飛行機で戻る。

市内のホテルで、ジョン・シリゴイ弁護士に会って、裁判の現状について説明を聞く。ポールさんたちの裁判もジョン氏が担当することになって、勝利判決に期待が持てる。(⇒詳細は清水靖子の報告記事をご覧ください)

その後、市内にあるリンブナン・ヒジャウ社(RH)のビルを見に行く。高いビルなどほとんどないポートモレスビーで、巨大なビルがそそり立っている。それがRHのビルだった。その隣には、これまた巨大な2階建ての細長いショッピングモールがあり、その内部には「RH・ハイパーマーケット」なる派手な電飾を散りばめたスーパーマーケットと、たくさんの店舗が入っており、客でごった返していた。

リンブナン・ヒジャウ社はニューブリテン島その他の原生林を伐採し莫大な利益を出し、日刊紙を含む多様なビジネスでパプアニューギニアを席巻している。



リンブナン・ヒジャウ社の社屋ビルとスーパーマーケット

宿泊先のホテルは、小さいが、きれいで整っていて、しかも料金が安い。物価が日本並みに高いポートモレスビーにあって、ホテル代は特に高額なので、この料金はうれしい。さらに、経営者がブーゲンビル島出身の若い人で、私たちの行きたい所にすべて連れて行ってくれた。話をしていると、彼は中学生のときにブーゲンビル島で成績が1番だったので、パプアニューギニア随一の名門校国立ソグレイ高校に入学できたんだと語った。同校は私が1990～1992年に日本語教師として教えていた高校で、同じ学校にいたことで盛り上がったのだった。

こうして、今回のパプアニューギニア訪問は、“Land of Unexpected”（何が起ころかわからない土地）の突発危機に出会ったりしつつも、結果的には大過なく終えることができた。

自然を守り、自然とともに生きている人々は、確固たる意思を持ってそうしている。その意思を無視して、一企業の利益のために、原生林の伐採を許してはならない。私は、日本で有機農業をしている百姓だが、有機農業と原生林の中で生きることの意味は、原点は同じだと知ることができた。日本での私たちの生活で、南の国々からの材木を安易に浪費している現状が、はるか離れたパプアニューギニアの森をなくし、人々の生活を困難に陥れている。現地の人々と私たちのつながりは深いことを改めて認識した旅だった。その生活と自然を守ることは、また私たちの課題でもあるのだ。

翌日のニューギニア航空の直行便で成田空港に戻ったときには、あまりの寒さに固まってしまったのだった。

初めてのパプアニューギニア

日本工業大学建築学科 池田英生

まず初めに、このような貴重な素晴らしい機会を与えてくださった、辻垣さん、清水さん、倉川さんをはじめ「パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会」の方々に、この場を借りて深くお礼を申し上げます。本当にありがとうございます。

2018年11月13日～24日、私は初めて日本を出て、「地上の楽園」パプアニューギニアに行ってきました。そこは、私の日常とはかけ離れており、すべてのことが新鮮であり衝撃を受けました。

1. 素材の味！豊かな食べ物たち

まず、この旅で一番お世話になった食べ物は、現地

の主食であるバナナだ。

11月15日、ポール・カテ神父に連れられてラバウルを散策した際、丘の上の小さな売店で色々な種類のバナナが売られていた。よく日本で見るバナナや、調理しないと食べられないクッキングバナナ、一つの実が小さいが皮をむくと十分に熟れていたバナナ。それぞれ違った美味しさがあり、大自然の中で育てられたバナナはとても美味しかった。

マラクル村ではバナナのほかに、自分たちで育てたタロイモを主食としていた。味はじゃがいもをあっさりさせてパサパサした感じ。「美味しいけどこれを3食はさすがに飽きるな」と感じていたが、お世話をしてくれたアグネスさんが、フライドポテトを作って



丘の上の売店の様子



売られているバナナの様子



アイビカのココナツスープ



フライドポテト

くれた。彼女はとても料理が上手で、魚の身をオイスターソースで炒めたものや、アイビカのココナッツスープなどを作ってくれた。どれも素材の味を生かしており、とても美味しく、私たちの村での生活をより豊かにしてくれた。

そのほかにも、ヤシの実や、パパイヤ、火山の地熱で卵を温める鳥の卵を初めて食べたり、木に実っているマンゴーを取って食べたりと、とても贅沢な食生活を送ることができた。

2. とても温かいマラクル村の住民

11月17日、ラバウルから10時間のボートの旅を終え、心も身体も疲れ果て、最終目的地であるマラクル村に到着した。ボートの音を聞き、村人たちが駆けつけてくれた。そして私たちの荷物をゲストハウスまで運んでくれた。彼らはとても人間味あふれていて温かかった。

ゲストハウスのお世話をしてくださっているスティーブンさんに連れられて、村の探索に倉川さんと一緒に行った。その道中、好奇心旺盛の子供たちが、ずっと「イケダッイケダッ」と言いながらついてきた。カメラを向けると恥ずかしがって顔を隠す子や、独自のきめポーズを披露する子など様々で、とっても可愛らしかった。

村の大人たちもすれ違うと笑顔で「モーニン!」「アピヌン!」と言ってくれる。

日本人とはどこか違う、人間本来の温かさを感じた。



倉川さんに興味津々の子供たち

3. 自然豊かな「地上の楽園」パプアニューギニア 多種多様な生物との出会い

ムー村からマラクル村へ帰る途中、ボートを操縦してくれていたポール・パボロさんが海面に指をさしボートをとめた。私は最初漂流物かと思った。しかし違った。ウミガメだった。私はウミガメを水族館にある水槽でしか見たことがなかったから、とても興奮した。自由に泳ぐその姿は、本来の生き物のあるべき姿だと再認識した。

マラクル村での最後の夜、スティーブンさんと倉川さんと「ほたるの木」を探しに行った。「ほたるの木」というのは、マラクル村では毎年、スシの泉で育った蛍が村の中にある1本の木に大量に集まるという現象のことだ。しかし、その現象は毎年違う木で発生することのであった。また、今年は本来、乾季のはずなのに毎日のように雨が降っていた。しかし、私たちがお世話になっていたゲストハウスのすぐそばの木で見ることができた。この世の物とは思えないくらい美しかった。まるでクリスマスツリーのイルミネーションのようだった。雨にも負けず力強く光り輝いていた。

そのほかにも大量のカエルや、ボートに並走して泳ぐイルカ、色鮮やかな魚たち、大量の湧水が滝のように降り注ぐワラカラブ、その他にもいろいろだ。この素晴らしい自然を作り出しているのはパプアニューギニアの原生林である。私はこの旅でそのことを学び、森を、自然を守らなければならないということを再認識した。



マラクル村の子供たち

ソロモン諸島、フィジー、ニューアイルランド島への旅 森と水を失った島々、奪った側の日本との関連は？

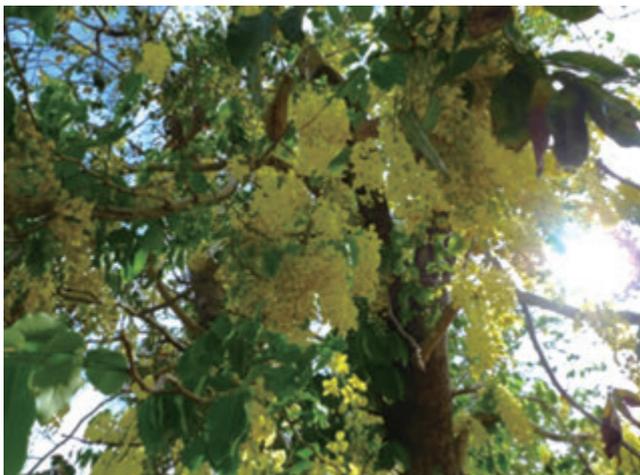
清水靖子

10月20日（土）21時35分発

夜半成田発のニューギニア航空の中は空席が目立つ。APECの準備行きか、ビジネスマンや官僚風の人びとが多く、皆ぐっすり眠っている。

予定通り21日（日）未明にポートモレスビーに着く。

ゴールデンシャワーの花がまぶしく輝き、APEC歓迎の看板が立ち並ぶ道々。出迎えのなつかしいシスター・メリリンの運転で、宿舎の修道院OLSH（Our Lady of Sacrate Heart）に向かう。



ゴールデンシャワーの花（WEBサイトより）

10月22日（月）

◎森を守る裁判のうちあわせ

ジョン・シリゴイ弁護士と会う。同行はレスター・セリーさんとシメオンさん。私たちが支援してきたコリンウッド湾の原生林を守る代表者たち。ジョン・シリゴイ弁護士の元で勝訴を勝ち取ってきた素晴らしい仲間たちである。

シリゴイさんは、ニューブリテン島南岸の、不法に奪われたSABL（スペシャル・アグリカルチュラル・ビジネス・リース）からの脱却を求め原生林を守る裁判を一手に引き受けている人である。この地域は、「パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会」が連帯してきた。

約束のロッジの中庭で話をする。

この高級ロッジの中庭にはプールもある。私たちから少し離れたところでは、政治家や企業関係者らしき人びとが小声で打ち合わせをしていた。

出されたコーヒーの別格の味といい、サンドイッチの中身といい、ここは庶民には遠いところ、普段は法律家や政治家が利用する待ちあわせ場所のようである。

午後は、旧知の友人のオフィスで、直接APECや、伐採問題の現状を聞く。

「APECの影がもう顕著に出ているよ。すでに大混乱ですよ」。「入国ビザについても、政府は急ぎょ一方的な通達をした。10月と11月に到着時のビザ取得は受け入れない。事前に取得しておくようにとの通達なのだよ。何千人が入国するこの時期、国内でもパニック。観光関係者や航空会社もパニック。キャンセルも相次いでいるよ。一方警備関係者は膨大な数に膨れ上がった!!」と言う。

「私も困っています。再入国のときのビザ取得にフィジーのパプアニューギニア領事館に出かけなければならないのですよ」と私も嘆く。

3週間後に、ラバウルに到着する予定の倉川・池田さんを思い、準備・手配をしておく。二人に会う日まで私も健康な旅を続けなければ。ソロモン諸島行きに向けて私自身の旅立ちも準備する。

ソロモン諸島への旅 10月23日～11月1日

森を守る連帯に、1990年以来、1992年、1993年、1994年、2007年、2008年、2009年、2018年と訪問をした。

今回は久しぶりの短期間訪問ではある。

①私たちが小さな支援をした地域の津波被害からの復興状況は？

原生林があるところと、ないところの復興の違いは？

■ ニューブリテン島南岸の村々が伐採企業を訴えた裁判

① マラナ・ランドのケース

2018年7月16日に裁判所に提出。次回は2019年2月の予定。

ノベルト・パメスさんが原告の中心になっている。マラナ・ランド（5000ヘクタール）は、地理的にはポマタ地域の海岸沿いに位置しているが、SABL（政府と企業によるスペシャル・アグリカルチュラル・ビジネス・リース）の伐採地域の対象には入っていないと主張する裁判。ノベルト・パメスさんの尽力が大きく、裁判としては進んでいる。

② ポマタ地域のケース

SABL承諾偽証サインの不正を訴えた裁判。SABLからの脱却を求める。ポール・パボロさんが原告の中心になっている。

2014年11月24日には、ニューブリテン島のキンベでの裁判所で、ギルフォード社（リンブナン・ヒジャウ社傘下）の操業中止命令を勝ち取る。しかしリンブナン・ヒジャウ社は首都ポートモレスビーで別の裁判を起こした。その後、キンベの裁判所にあったポールさん側の裁判書類が、首都の最高裁への弁護士に渡る過程で紛失したのだった。書類紛失という謎の出来事は、高度に政治的な問題、森を守る裁判では多々起こっている。現

在ポール・パボロさんの尽力で書類は回復。新たな資料づくりとともに、裁判の遂行へ、ポールさんを助けるシリゴイ弁護士も全力を誓う。

③ レラ地域のケース

豊かな川と森と海の幸に恵まれ、力強い伝統を生きるタポロ村を中心に、ピーター・キケレさんが核となって提訴した裁判。

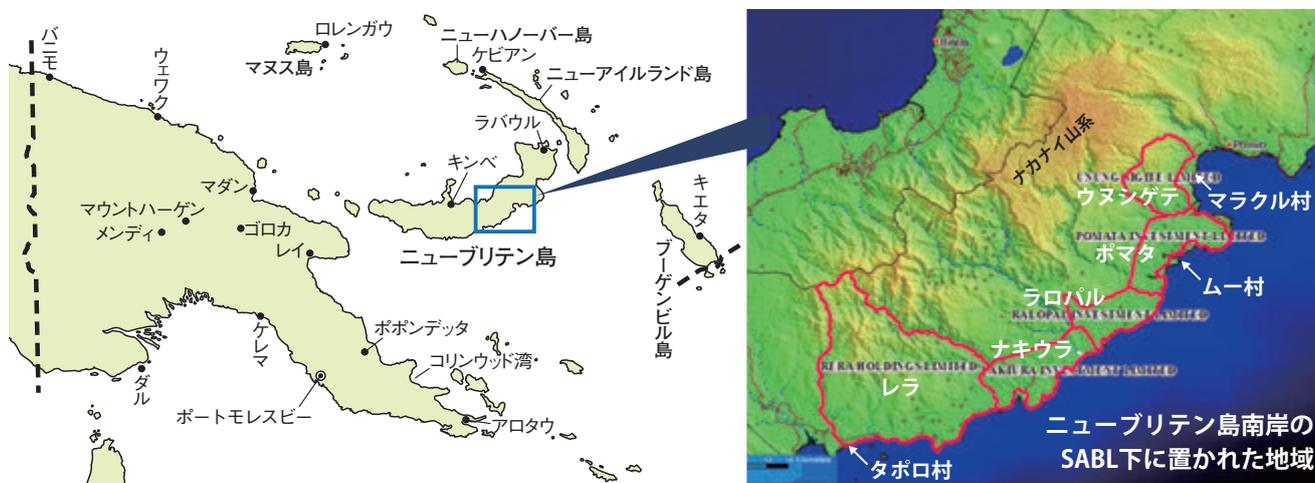
SABLからの脱却を求めている。伐採は始まっていない。

④ ウヌシゲテ地域（マラクル村中心）

水と森と洞窟の秘境。村々はその秘境を誇りとして生きている。

「パプアの森を守る会」の2017年来の訪問と連帯もあって、結束して伐採に反対している。SABLからの脱却を求めている。

すでに過去のニューズレターには、これらの地域が政府と企業による不正と欺瞞によって、どのようにSABL（スペシャル・アグリカルチュラル・ビジネス・リース）に入れられてきたかを詳細に記した。今号では新しい読者のために地域の特徴のまとめのみとした。



②漁業問題。ノロ港での大洋漁業撤退後の現在のSOLTUNA社の状況は？

③奪われていく海と森の幸の状況と地元の人びとの暮らしは？

等々について見ていくことだった。もっと時間がほしかったが……。

10月23日(火) ホニアラへ

8時55発のニューギニア航空機で、首都ホニアラに着く。空港前の路上には人があふれている。強烈な日差しに、ああ、ここはソロモンだ!!と実感する。

この空港は、ルンガ河口近くの湿地にある。雨期になると浸水しやすい。日本政府のODAによって建設され、今回もODAで補修された後であった。

空港には、シスター・マリア・トラ（ドミニコ会）が迎えにきてくださる。2007～2008年の津波支援を共に実施した仲間である。砂ぼこりの舞い上がる坂道を登り、丘の上の修道院に着く。2階からは輸出港に出入りする船の動きがよく見える。

「見晴らしがいい家ね」と私。「元マレーシアの伐採会社の家だったのよ。頑丈なつくりだから買ったの」との答え。「へえ～、修道院は元伐採企業の家だった

のね。複雑な気持ちね……」と言うと笑っていた。

10月24日(水)

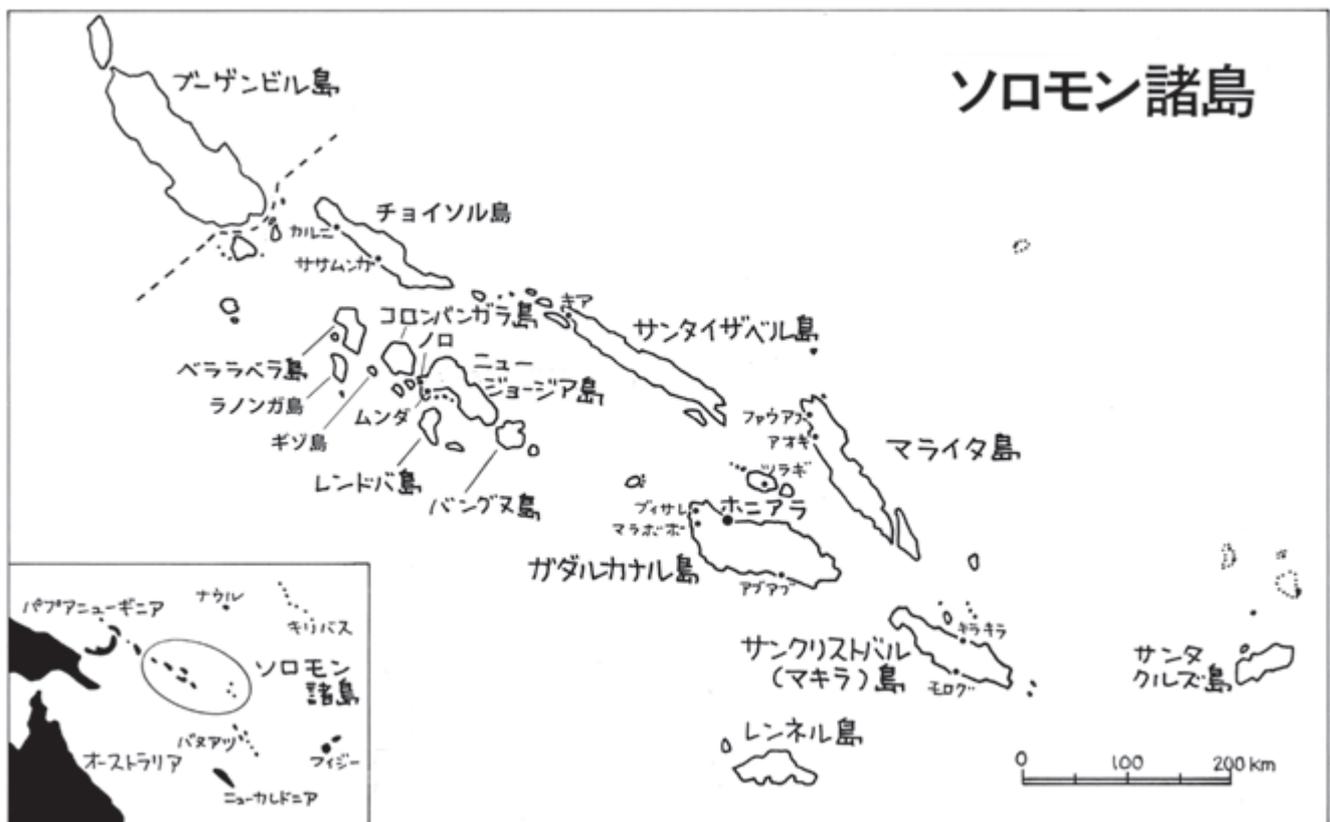
チャイナタウンのなかにあるNGO、SIDT（Solomon Islands Development Trust）に行く。木の根の上にひとりの大男がぼうぜんと座っていた。「ちょっと熱があつてね」と言う。所長代理の彼に伐採資料を所望すると、「今は調査よりも、地主への啓蒙活動が中心だ」と言う。伐採資料など調査することはないとのことであった。かつての創業者アブラハム・バエアニアさんは、森を守ることと企業の調査に生涯を捧げていたが、帰天した後はこのSIDTも様変わりしている。

森林省で伐採資料をもらうべく、同省に向かう。しかし女性職員の帰天直後で、職場でも伝統の“沈黙を守る”喪中であり、伝言を伝えるのみとする。

10月25日(木)

今日は朝一番に出かけ両替をすませる。日本円は驚くほど安く交換される。ふとところが寂しくなるかもしれない。

その後ホニアラの大きなマーケットに行く。いつでもどこでも、マーケットは民衆の熱気であふれている。



いま旬のラウラウの優しい香りの実を売っているお店があっちにもこっちにも。さっそく買って食べる。甘酸っぱさとコリコリ感が口にひろがる。

魚は、このマーケットのにぎわいの中心である。カツオ、マグロに加えて、環礁の魚が並ぶ。ガダルカナル島海岸域からはもちろん、マライタ島からも、クーラーボックスに入れた魚をボートで運んでくる。夜釣りから未明にかけての水揚げである。

今日は私のおごりで、白とピンクの環礁の魚を買う。その魚は夕食時にムームー風の料理にして出された。絶妙な甘さと新鮮さ。ソロモン諸島の海の香りと味が口いっぱい広がる。

10月26日(金)～28日(日) ギゾ島での調査

9時半出発のソロモン航空機で約1時間後にギゾ島に向かう。今回の訪問は、2007年、2008年、2009年以來の4度目である。

ガダルカナル島からギゾ島にかけて眼下に広がるのは、無残な伐採の爪跡である。かつての伐採の比ではない。喰いつくされていく森また森……。周辺の海域の汚濁。環礁の白化。

◎津波被害の11年後の現状

2007年4月2日早朝に、この地方をマグニチュード8.1の地震が襲った。最大9メートルの津波に、ウエスタン州では、ギゾ島はじめ近隣の島々が壊滅的被害を受けた。被災者はおよそ5万人、死者は53人。がけ崩れ、家屋の崩壊、家財、特に漁労生活の道具、漁船・ボートが流されたのは痛かった。

「パプアの森を守る会」は調査を行い、小規模だが自力復興へのテコとなるような支援を行った。

ギゾ島の被災者の一部にトイレ設置、失われた漁業用ネットなど。さらに西方のチョイソル島のモリ地区へは、流されてしまったコプラ・ドライヤーの新設。ベララベラ島のレオナ村へは、コプラ・オイル絞り機とミシンを支援した。

被災地の11年後の状況はどうか。

湾内の島にある空港には、修道院のマリア・トラとマトウラナが出迎えにきてくださった。私たちはボートで、同じ湾内の小さなロガ島に向かう。旅の荷物をほどいて、「湾内の島っていいなあ」と見回す。

まずは、ギゾ島最大の被災地であったヌサバルカ地域、ティティアナ地域、マラケラバ地域を訪問した。被災者たちは、これらの地域で漁労をおこなってきた人びと（主にキリバスからの人びと）である（注：英国・米国による67回におよぶ核実験の影響を逃れて移り住んだ人びとも多い）。

被災者たちは、ギゾ島では津波直後は、丘の上の仮設住宅に滞在していたが、現在は元の海岸地域に戻り、漁労活動を開始している。

インタビューした家族は口々に言う。

「環礁も、津波以後回復していないし、最近魚を獲るのに相当遠方に行かねばならない」

「ギゾ島のマーケットで、その魚を売って暮らしている。でもボートの石油代とマーケットへの運搬代で、収入はわずかになる」

津波による環礁の壊滅以外にも、近年の外国巨大漁船による乱獲が、地元のささやかな漁師の漁獲量を減少させ、暮らしの苦境に追い打ちをかけていた。

実は、ギゾ島の目と鼻の先の海域で大企業漁船の操業が行われている。

巨大マグロ企業Tri Marine International社とその子会社のNational Fisheries Development (NFD) のまき網・一本釣りの漁船群が、カツオ、マグロ（キハダマグロ）を漁獲。年間水揚げは2万5000トンから3万トン以上。ノロ港にある自社傘下のSOLTUNA社の工場加工し、缶詰は国内用と海外用、キハダを中心とする冷凍魚は、日本にも輸出している。

親会社のTri Marine社の漁獲量に至っては誰も知ることがない。それ以外にも諸外国の大型漁船がマグロ・カツオを奪っていく。ささやかな漁労生活者に影響を与えながら……。

被災者の間に貧富の差も出ていた。

たとえば津波のなかで、ボートとエンジンを失わなかった人びともいる。

ギゾ島マラケラバ地域のエリオット・リジェさん(58歳)は、流されなかったボートで、まずは近くのシンボ島に孤立していた人びとの救出に馳せ参じた。多くの人びとを助けたという。

その後、ボートで自分の家族の収入を助けた。材木を運び、ギゾ島復興建設に必要な材木も供給し続けた。



マラケラバ地域のエリオット・リジェさん (58歳)



自力で建てたエリオットさんの家

そうして蓄えた金で丘の上に立派な家を建てた。

一方で、ほとんどの被災者は、現在海岸低地の掘っ建て小屋小屋に住んでいる。

ギゾ島は、もともと森が乏しい。被災後はさらに、飲み水確保には厳しい環境となっている。水脈は潰れ、雨水タンクを設置するか、穴を掘って底に溜まっている水で暮らす方法しかない。その水汲みは、最大の苦勞で、家族・子どもたちが助け合って水を得てい



マラケラバ地域。穴を掘って底に溜まった水を汲み上げている家族。背後に崖があるので地下水が多少はあるが濁っている。

た。

大きな支援 (JICAによる病院建設など) は整ったが、人びとの暮らしの復興は遠い。漁場としての海での資源の減少と、陸の森の有無、資源の有無が、被災からの復興を左右していることが顕著だった。

チョイソル島での、私たちのコプラ・ドライバー・プログラムの設置責任者であったロジャーさんに出会う。



ロジャーさん

「コプラ・ドライバーは自力復興のテコとして大いに役立った」。その後再建しつつ、人びとは助け合って生きているとのことだった (ただし彼はギゾ島に移住していた)。

レオナ村の指導者とは会えなかった。

このレオナ村は、被災地に侵入したオメックス社 (リンブナン・ヒジャウ社傘下) を相手に原生林を守る闘いを繰り広げ、裁判にも勝った。しかし去らない企業に女性たちは奥地にテントを張って原生林への道を封鎖した。それに対して企業は女性たちをナイフで



ティティアナ地域。マングローブの奥地の湿地とその奥地に住む家族たち。地下水は乏しく、共用の雨水タンクからの遠い水汲み労働で暮らしていた。



ロガ島で出会ったチョイスル島の人びと。なんという明るさ。元気さ。底知れぬ力を見る思いがした。

刺して負傷させるという事件も起す。しかし女性たちはひるまなかった。2007年クリスマスに、ついに企業は引き上げたのだ。ソロモン諸島の森を守る歴史のなかで大きな出来事であった。背後に広大な保護区も設けた。

2007年7月11日に私もレオナ村の人びとと共にいた。ボートで航行中、企業からパチンコで石を投げられ、さらに雨中を追われたことを思いだす。村人による抵抗のなかに、共にいた私の懐かしい思い出でもある。

しかし最近になって、部族関連の出来事から一部の森の伐採を許してしまわざるをえなくなる。

この津波からの復興支援を通して、「パプアの森を守る会」として気がついたのは、レオナ村をはじめ、原生林を守ってきた地域では、津波からの復興が早かったことである。

深い森が海の再生を助け、住民の暮らしの糧となったからである。

加えて山からの水が潤しつづけていた。

森を失った村々では、飲み水も食料も不足する困難のまま、今に至っている。



その傍らの海辺で綱渡りして海に飛び込んで遊ぶ少女たち。その逞しさに思わずカメラを向ける。

ちなみに2016年のソロモン諸島からの輸出統計によると、輸出品総額の66%を原木が占めている。原木輸出で政府と企業が潤いつづけ、民衆は森と水と暮らしを失って行った。

海では大型外国漁船がマグロを、森では人びとの抵抗を無視して、伐採企業が原木を奪い、人びとの暮らしの土台を根こそぎ崩壊させていた。

参考資料：OEC統計2017年 ソロモン諸島からの輸出品 (<https://atlas.media.mit.edu/ja/profile/country/slb/>)

10月29日(月)

◎ムンダでの調査

早朝ギゾ島を発ち、20分の飛行でニュージョージア島のムンダへ移動。

ムンダはニュージョージア島の表玄関である。あまり知られていないが日米の最大の激戦地のひとつでもある。この地で無数の日本兵が死んだ。住民は奥地に隠れて戦禍に耐えたという場所である。現在の人口は3000人。

かつてアブラハム・バエアニアさんが、私をこのムンダに連れきてくださり、森と魚について多々教えてくださった。その最初が1990年だった。以後1992年、1993年、1994年、2007年、2008年、2009年、そして2018年の今年8度目である。

飛行場には、家族経営のペンション、ラビヒナ・ロッジの女主人の娘が迎えにきてくださった。

◎宿泊したサイラス一家経営のペンションの物語

2009年来2度目の宿泊である。夫のサイラスさんはすでに帰天していた。

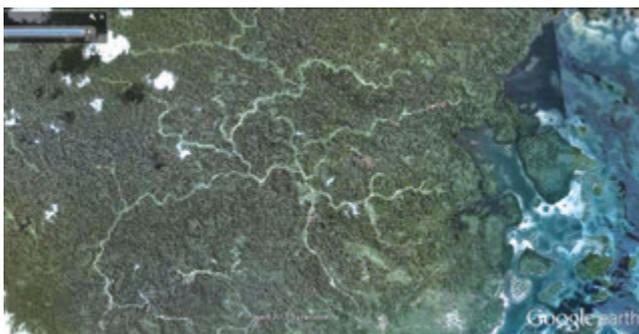
彼はムンダの奥地の残る森7000ヘクタールの伐採に抵抗した人であった。2009年11月9日、トラックに村々の子どもたちを乗せて、伐採をとめる道路封鎖をした。私はそのときの彼の勇姿を忘れることができない！ 活動家ではない!! やむにやまれぬ思いで行動に出たという。「僕は伐採地に行かない。見ると悲しくてたまらなくなるから」という老人などが彼の友だちであった。

その森は、一部の有力者による契約でデルタ社（リンブナン・ヒジャウ社傘下）に伐採権が与えられ、あっという間に道路がつくられ、10台のブルドーザーで伐採が開始された。蚊帳の外に置かれていた人びとが抗議したが、後のまつりだった。そこからの原木は日本にも輸出されてきた。“昔戦車、今ブルドーザー、いのちが伐られ日本に行く”。

森がないから、地下水を汲み上げての水道水は水質が良くない。余力のある家は、飲み水タンクや、動力で地下水（塩っぱい）を汲み上げて併用していた。



宿泊したペンションの女性たち



ムンダ奥地の伐採道路 (Google earthより)

午後、ムンダの森林省に行った。長年伐採の詳細を語ってくれた顔見知りのケルウィン・ロイさんは他所に移動。所長代理の役人は、伐採資料には精通していなかった。資料は首都ホニアラのオフィスで管理している状況のみと言う。

10月30日 (火) 朝

今日の森林省訪問で、フィリップ・ゼケレさんに出会う。



フィリップ・ゼケレさん

彼はチークやマホガニーなどの種を集めて、苗木を育成する仕事を専門としてきた人だった。ムンダの土壌は良くて早く育つとのこと。森林省は基本的に伐採に反対する人びとの立場には立たない。地主のもめごとの調停とか、“植林”をする方向が中心になっている。

なおムンダの対岸のコロンバンガラ島では、日本の双日が、2008年に買い付け契約をKFPL社 (Kolombangara Forest Products Ltd.) と結び、同島植林地から、ユーカリを輸入しつづけている。かつて私は、2003年に同島植林地を訪問したが、今回は調査をする時間がなかった。

ムンダもコロンバンガラ島も、激戦地のひとつである。なぜ激戦地と戦後日本の企業活動が重なってくるのか、これも興味深い関連である。

◎“ソロモン諸島で伐採が始まった最後の島” ラノンガ島について

フィリップさんの出身島。ラノンガ島は地震で環礁が上昇したうえに、元々森は深くなかったので、地下の水系からパイプで水を引いて飲み水にしていた。ココナツの木々の多い島といってい

「森が深くないので伐採企業から目をつけられなかったのさ!!」

「住民は魚と野菜をギゾ島のマーケットに売って生計を立ててきたので貧しくはなかった。

でも、つい最近、伐採企業が目をつけた。小さなサイズの木まで伐採するという貪欲な伐採だった。契約をした人は、何で伐採企業を招いてしまったか理解に苦しむ。今は水系も破壊され、飲み水にも野菜作りにも苦労している」

午後ノロ港のSOLTUNA社へ向かう。

フィリップさんにSOLTUNA社の要人を紹介してもらう。

昼食はマーケットのバナナですまし、森林省の前のバス停から、北西岸のノロ行きに乗る。約40分。バス代は20ソロモン・ドル。

かつてこの道は、うっそうとした深い森だった。森を守るソロモン諸島の魂ともいわれるアブラハム・バエアニシアさんと古いトラックで通った道。そのトラックが故障して、私ひとり、しばし森に残された。高い樹木の上で鳥たちが私を見つめており、帰路の夜の飛行場には、蛍が何千匹と浮遊していた。その思い出がよみがえる。アブラハムさんは2018年に帰天し、いまは森も蛍も面影はない。

バスの旅の終点のノロは、マーケットと船着場であり、SOLTUNA社入口とは離れていた。

「まだずっと先だよ」と言われる。歩き始めたが日照りの路上でふらふらになる。そこへタクシーが！

SOLTUNA社に行きたいむねを告げると、「わたし、ニホンに行ったことある。ニホン語もできるよ。



SOLTUNA社に勤めていたというタクシー運転手

SOLTUNA社にいたことある」という運転手だった。彼のお陰でまっしぐらキタノ埠頭のTri Marine社とNational Fisheries Development (NFD)の入口経由、SOLTUNA社へ。

かつてこのノロ基地には大洋漁業（子会社ソロモン・タイヨウ）が操業していた。私はその時期に3度、1990年、1992年、1993年に調査訪問をした。このときは『森と魚と激戦地』（北斗出版、1997年）に詳細を書いた。

その後マライタ島関連の紛争の影響を受けて、大洋漁業は2001年に撤退し、現在はイタリア系Tri Marine International社傘下のSOLTUNA社が操業をしている。

注：日系ソロモン・タイヨウ（大洋漁業=マルハ）撤退後に操業を始めたSOLTUNA社に関してはこちらのサイト (<http://www.foodprocessing-technology.com/projects/soltaituna/>)

◎SOLTUNA社でのインタビュー

正門から入り、2階建ての事務所に案内される。かつて大洋漁業時代に来たのと同じ事務所だった。今は、Tri Marine社（マグロ漁獲・貿易・製造）と、その子会社National Fisheries Development (NFD)が漁獲・水揚げ、その傘下、SOLTUNA社が加工製造を



Tri Marine社2018年9月10日のプレス・リリースより

行っている。NFDは2隻のまき網船と7隻の一本釣り漁船を所有していた。

人事部門のマネージャーのベルタ・シミカさん（写真右）と、クリス・エヴォさん（写真左）が、インタビューに応じてくださった。ベルタさんは、歯切れのいい英語で喋る。彼女は2年前にこの職に応募してきた人で、「女性の労働環境改善に尽力してきたのよ」と強調する。

「2000人の労働者。そのうち1500人が女性労働者よ。毎日200トンの生産量を目指しているの。これはかなりの生産量でしょう？ そのため寄宿舎も、村々から通うバスやポート代も、食事も会社が提供よ」

「収入の使い方の研修や、サモアやホニアラやパプアニューギニアに送った労働者の養成も行っているし、人材養成や労働環境改善に力を入れているの」と語る。

このことは、日本のソロモン・タイヨウ時代におろそかにされていたことで、現在のSOLTUNA社のほうが上だと誇る。

以前から問題となっていた魚の廃棄物は、魚油と葉、魚粉として鶏と豚の餌を作って輸出までしているとのこと。住民によると、「廃棄物は最後に海に流される」とのことだが。

「ただし缶詰の技術は日本人技術者の時代のほうが上だよ」と当時を知るクリス・エヴォさんが誇らしげに補足する。

最後に生産量の資料を要望したら、こころよくプリントしてくださった。以下がその一部である。

SOLTUNA社の工場での製造量

2012年	1万2824トン
2013年	2万0304トン
2014年	2万3387トン
2015年	2万1552トン
2016年	2万0565トン
2017年	2万3268トン
2018年9月現在	1万9113トン 毎日200トンの製造

缶詰は国内用（カツオ中心）と海外用（キハダ中心）。キハダやピンナガの冷凍魚と、キハダのロイン（真空冷凍パック）は輸出用になる。魚粉も飼料として輸出されている。



人事部門マネージャーのベルタ・シミカさん（写真右）とクリス・エヴォさん（写真左）

注：日本との関係

財務省の2013～2017年の統計による輸入冷凍キハダの大半は、ソロモン諸島からのものである。

OEC統計によると、ソロモン諸島からの輸出先（2016年）は、冷凍魚の輸出先は、タイ（59%）、イタリア（26%）、日本（9.5%）となる。ロイン（真空冷凍パック）の輸出先は、95%がイタリア。その他米国となっている。

親会社のTri Marine社の漁獲量はわかりますか、と聞くと……、

「私たちがわからない。イタリア系で、ノロでの社員のうち8人が外国人だよ」との答えだった。

ちなみに、ソロモン諸島2016年の漁獲量は7万7000トンであるから、SOLTUNA工場ではなく、直接諸外国に送られるマグロ類の量は相当なものと推定できる。

10月31日（水）

ムンダに戻って休養とインタビューのつづき。

11月1日（木）

ムンダ9時55分発、1時間後にホニアラへ。

ムンダ飛行場での待ち時間、気候観測員の人から話を聞く。「エルニーニョの現象が出始めている」との統計を見せてもらう。

毎回ここで聞く話は、飛行機の遅れを補ってあまりある。いつもの楽しみである。

ホニアラへの空路から見る伐採状況は、あまり痛ましい。村々で抵抗してきた人びとを思うと胸が痛む。

ホニアラでゆっくり過ごし、明日のフィジー入りに備える。



空路から見る伐採状況

フィジーへの旅 11月2日～11月9日

1993年と1996年来の3度目の訪問

目的 奪われる森と地下水の調査

急激な経済変貌と住民の暮らしは？

11月2日(金) ビチレブ島ナンディ着

ホニアラ13:05発の予定であったが、パプアニューギニアからの便が遅れたため、ホニアラを遅く出発。夕方近くに、ナンディ国際空港に着く。

1993年に来たときは小さな空港だったが、巨大な施設になっていた。1億フィジー・ドルを超える費用で改築を完了させていた。日本円で50億円以上。これが太平洋の空港？と驚く規模だ。フィジー政府から受注



上空から見たナンディ

したのはHawkinsという著名な建設会社（ニュージーランドの会社）だった。

マリア会のシスターたちの車で、一気に修道院へ着く。

この道路も上記の会社によって建築されている。かつては土埃の凸凹道だったのに、その変貌に驚く。

夜は、扉のない仕切りだけの部屋で寝る。夜半はかなり冷えた。明け方外を見ると、丘にへばりついたような荒れ地に小さな家々が見える。

起きて部屋を出ると、他の部屋も仕切りだけで風通しがいい。この修道院は、イギリス植民地時代の私立学校を改造したとのことで、風通しが良すぎて寒かった。

フィジーは南半球に位置し、熱帯海洋性の気候で、気温は平均25度前後。日本の夏より涼しく、熱帯夜などない!! 火山の島であるこのピチレブ島は、丘状の山の起伏が交互に連なる。

汚染された川もあれば、山間の水源もある。荒れた大地と野菜・牧場・砂糖畑とカリビアン・パインの植林が混在する。

11月3日(土)

ゆっくり休んだ私に、「デナラウ・リゾートを見て



フィジー



みたい？」と院長のローラ。「もちろん～」と答える。修道院から車でハイウェイを南西に向かうこと20分。橋を渡りぐるぐると曲がると到着する。かつて来たときに、デナラウの地ならしと埋め立てで揉めていたことを思い出す。

夕暮れの湾内には遊覧船や数知れぬヨットが停泊し、岬に沿ってホテルが林立し、欧米系の観光客がそぞろ歩いている。日が落ちると広場に松明が灯り、太鼓の音とともに火の踊りが始まる。私たちはドリンクとパイを買って石段に腰掛け、しばし時を忘れる。

明日からは、フィジーのサマータイムが始まる。暑さ対策で早く起きて、早く寝るためというが、あらゆる時間調整で混乱のようすも伝わってくる。



デナラウ・リゾートの港

11月4日(日)

◎ローラの森

「もうフィジーには在来種の森も、太古からの天然林もないのよ」

そう言って、シスター・ローラは私に、自分の森を見せる。ちいさな森、苗床からの樹木だった。

フィジーの天然林は、伐られつくして輸出されたのだ。しかし嘆くだけではない。彼女のすごいところは、“在来種の木を植えるプログラム”を、修道院の片隅や、自分の故郷の島で始めているところにある。未来志向のシスターなのだ。

彼女のお目当ては、2世代持つ家の柱の、クイラの樹とか、泉のほとりに自生するココアの樹とかの植林である。やがては、故郷の島を在来種でいっぱいになりたい。

私たちは、意気投合してフィジーでの森の回復へのユメを語りあった。



ローラが育てている在来種の小さな森

11月5日(月) ラウトカにて

ナンディの北にあるラウトカの港には、フィジー・パイン社の日本向けチップが巨大な山となって積まれていた。港にはコンテナが立ち並び、その向うに巨大な船が待機している。

このラウトカは首都スバに次ぐ第2の都市。砂糖、木材、フィジー・ウォーター等の輸出産業の拠点がある。大きなショッピングセンターは、下校時の多様な制服の高校生（フィジー風の腰巻姿もあり）でにぎわっていた。

日本へ輸出される製紙用チップの山を見上げつつ、地元の森林省ラウトカ営業所に向かう。

参考：フィジーからの輸出品 (<https://atlas.media.mit.edu/ja/profile/country/fji/>)

その森林省の庭には、網で覆われた苗床がずらりと並び、スタッフが4人ほど、苗床づくりをしていた。ローラさんは、ここから苗を分けてもらってくるのだそうだ。

彼女の畝と同じく、クイラあり、コカあり、Flame tree やサンダルウッドも植えていた。

この小さな努力！ 優しい手で小さい苗をくり返し植えているスタッフの笑顔。大きな樹になるには何百年後になるかもわからないのに。

一方で、その同じビチレブ島から、輸出されつつげている天然林がある。製材が中心とはいうが……。



地元の樹の苗床づくりに励む森林省スタッフ

◎フィジー・パイン社でのインタビュー

1989年に私はフィジー・パイン社の見学をしたことがある。あれから30年もたっている。

1972年来操業をしており、1991年にフィジー・パイン社と改名。

このフィジー・パイン社からの、カリビアン・パインのチップを、独占入手しているのは伊藤忠である。

工場は道路を挟んで向こう側、反対側に事務所がある。ちょうど昼直前にフィジー・パイン社の総支配人のアソセラ・ワタ・コカナカギ (Asosela Wata Cokanacagi) さんに会うことができた。すべてシスター・ローラのおかげ。

以下コカナカギさんによる説明である。



アソセラ・ワタ・コカナカギさん

現在8万4000ヘクタールからの操業。そのうち5万9000ヘクタールには植えていない。

地主からリース契約している土地で操業している。保全地域、歴史的な土地あり、急斜面あり、そういうところには植林していない。

フィジーは雨が多い。暑い。カリビアン・パインの成長が早い。カリビアン・パインはソフト・ウッドではあるが、ハード・ウッドとの中間でもある。毎年の植林は500ヘクタールを目指している。森林ステーションは6箇所もつ。

このカリビアン・パインのチップを、日本の伊藤忠がフィジー・パイン社と独占的輸出契約を結んでいる。日本での上質の製紙原料となる。

「日本の伊藤忠はね、チップの質にこだわる。きびしくチェックしてくる」と総支配人は言う。

しかし、やはり土壌の流出や劣化は免れることはできないと認める。

チップ輸出量は、2014年2万4199トン。2015年16万8364トン。2017年9万2131トン。

年に4～5回の船積み。一船満杯の場合4万2000トン。ものすごい量である。

伊藤忠は利益を出すためにできるだけ積み込む。日本とフィジーは距離的に近いので、船で輸送しやすいのだそうだ。さらに伊藤忠は、仲介業者として、そのチップを日本各地の製紙工場に売っている。

これが日本の私たちの使用している上質紙と、南太平洋の小さな島との関連の一端である。



フィジー・パインのチップ積み出し港でのチップの山



フィジー・パイン社の製材とチップ製造工場

総額の16%をフィジー・ウオーターが占める。総量は記載されていない。輸出金額は130万米ドル。輸出先は83%が米国である！

すでにフィジー・ウオーターについて調査したジャーナリストがいる。その米国のジャーナリストは政府から圧力を受けた。フィジー・ウオーターと、村々への水供給不足と汚れた水により腸チフスが広まったときの動画もある。

住民は濁った水を飲み、米国の会社は、毎日膨大な量の水ボトルを世界各地に輸出している。主な輸出先

◎企業秘密で覆われたフィジー・ウオーター

午後の森林省で、事務所のアオアベ・ドリカルさんにインタビュー

フィジー・ウオーター社（巨大米国企業）について、彼は言いにくそうにこう語った。

「フィジーの政治・経済に与えているインパクトは大きい。特に政治への強い影響を持つ。政府への強力な財源でもあるから」

「地下水への影響もはかりしれない」と語る。6000本のペットボトル分を日々、かぎられた地下水から採取しつづけている。

OECDの統計（2017年）によると、フィジー輸出品の



森林省のアオアベ・ドリカルさんとシスター・ローラ

はもちろん米国であるが、日本にも輸出されている。通販で一本168円前後の値がつけられている。「シリカ入り」と言うキャッチフレーズは、以下の公式ページから見られる。フィジー・ウォーター (<http://fijiwater.oneandonly.jp/assocav2.html>)



フィジー・ウォーターへの批判が強いことを知っている同社は、情報提供も、調査訪問も厳しく制限している。

取水場所は、ピチレブ島の北岸奥地の丘のふもとの工場である。一般の人が入ることもできない。

年間取水量も、販売量も、公表されない。秘密のベールで覆われている。

利益の分配にしても、本来、地主の土地から取水しているのだから、地主との純益の分配もあってしかるべきとの批判もあるが、分配など、そもそもない。

最後にアオアペ・ドリカルさんに聞いてみた。「訪問のために誰かを紹介してもらえないでしょうか。彼が私のために、フィジー・ウォーターに電話をしてくれたようだ。その後返事をもらう。

同社からの返事はこうだった。

「フィジー・ウォーターのことを調べたい人は、自分の弁護士を連れてくるように」

「面会者の弁護士といっしょに来ないかぎり、調査や面会は断っています」とのことだった。

別の方面から、シスターを通して、メールで申し込みをしても同じ返事だった。

私たちがフィジーからの水を飲むとき、背後に何があるのか、それによって地元の人びとが何を失っているのか、その小さな島の地下水は、その土地と森からの、その土地に住む者への過去からの贈りものなのだ。私たちはその貴重な贈りものを奪っていいのだろうか。

さすがのローラも私も、かなり疲れて帰る。

11月6日(火)

この日は洗濯と休養。明日のスパ行きの準備にあて

る。首都スパのパプアニューギニア領事館で、入国ビザを取得するための旅行である。

11月7日(水) 首都スパへのバスの旅

ナンディ空港の広場にあるバス停から、スパ行き11時発の高速バスに乗る。15フィジー・ドル。全長211キロの道路を、西から東に向かうかなりの大旅行だ。

低地と低い丘のサトウキビ畑あり、耕地とそこから蛇行してくる茶色の川あり、荒れた大地がつづく。

南岸のシガトカという大きな街に着くと、20分の休憩となる。この地域はフィジーの食料庫か、サラダゴールともいわれる野菜生産地を背後に控える。

パブリックホリデーで今日はほとんどの店が閉まっている。しかし、バスの客目当ての道端の屋台はあちこちにある。

昼食を買おうと、その屋台の一つに行く。「これください」と言うと、大きな澄んだ目で私を見た少年が、「日本人？」と即座に聞いてきた。どうしてわかったのだろう。鋭いではないか。

注文した食べ物はロティと呼ぶものらしい。厚手のタピオカ・クレープで包んだトマト、ジャガイモ、ひき肉の詰め物である。

バスに戻って、期待しないで食べ始めたら……。クレープの弾力性といい、香辛料と詰め物のバランスが絶妙だ。屋台のうえのものが、こんなに美味しいとは、いや屋台だから美味しいのかもしれない。しあわせな気持ちで車窓を見るが、もう少年の姿はなかった。

バスはやがて美しいコーラル・リーフ海岸に出る。山際からの清らかな流れあり、海では釣り人あり、その間にリゾートホテルが点在する。急に雨になり、外の景色が一変して濁り絵となる。

スパの手前の静かなラミというところで下車。その山手に修道院があった。ナンディと同じマリア会の修道院である。8人のシスターたちが、それぞれの仕事をもって活躍していた。そのうちの正義と平和協議会の事務局のシスター・サロメが私を明日、ビザ取得に連れて行ってくださることになる。

11月8日(木)

◎ビザ発給までのすったもんだ……

朝9時、スパの中心部にあるパプアニューギニア領

事館にサロメと一緒に到着。9時ぴったりにドアをノックするも答えなし。二人で鍵穴から中をのぞいて見る。と後ろから声がかかり飛び上がる。鍵穴から中をのぞいているところを見つかるなんて、生涯ではじめてなので笑いたくなった。笑いをこらえている私たちに、係りの女性は問い詰める。

「何をしているのですか」（何って？あなたが遅くなったのでは？と言いたいところをこらえて……）

「日本からの連絡をしてあるのですが、メールが着いていますか」

「来ていませんね。夕方私たちのボスが来ますから、そのとき来てください」

あまりにそっけない。今日はナンディには帰れないと覚悟を決める。

待機すること8時間。私たちは領事館から数分のサロメの事務所(カテドラルにある正義と平和の事務所)に戻り、そこで過ごす。いろんな人が出入りをするから楽しい時間となったのは事実だが……。

日本にいたときから連絡して会いたかったセイニ・ナボタ(元女性議員)も来てくださり、皆でわいわいと盛り上がる。フィジーでの女性蔑視の問題になるとさらに議論は沸騰。

セイニ・ナボタさんは、環境問題にも詳しい。そこでフィジー・ウオーターのことを聞く。

「大きな問題は情報公開をしないことね。まして生産量や輸出量、収益なんてまったく不明。政府の勧誘で地主たちはフィジー・ウオーターに土地を提供するサインをした。受け取ったのは少しのお金。フィジー・ウオーターが行っている膨大な輸出操業からの利益の分配なし。私たちの要求は公表すべきなのに全くして

いない」と批判。「かなり以前に米国のジャーナリストが批判的な記事をしっかり書いて好評だったの。人びとはフィジー・ウオーターが住民の地下水を奪っていくことに目覚めたの。でもやがてフィジー政府から圧力を受けたのよ……」と、ここでも同じことを聞く。

「フィジー・ウオーターは操業内容の情報公開をすること」とセイニさんは繰り返す。

夕方の領事館行きは、このティモティテ神父が同行してくださる。優しい静かな人だったが、領事館で彼は突如、威厳のある厳しい声でこう言ったのだ。

「なんでこんなに待たせるのか。客人に対して失礼ではないか」云々。例の事務員はすっかり態度を変え、あたふたと、夕方到着した彼女のボス、女性の上級書記官に対応を求め、ビザの発給とあいなった。

ビザ代に100フィジー・ドル(私が空港で換算した日本円6000円に相当)である。ビザ代と交通費、予定していなかった宿泊費ほかの臨時出費で、持参した財布は空になる。

でも素敵な人びとに出会わせてもらった一日だったし、修道院のシスターたちも本当に優しくかった。いい旅だった。

今回、フィジーの大規模マグロ産業について調査する時間がなかったが、外国大型船によるマグロ漁獲量は1400トンを占める。PAFCO社(Pacific Fishing Company)による缶詰などの加工魚の95%は米国へ。冷凍魚の33%は中国、16%が日本に。水産輸出はフィジーの第4位を占める。

統計は以下のサイト(<https://www.globalnote.jp/post-2505.html>)からも得られる。

11月9日(金)

眠い目をこすりながら起きて、スバまで行き、朝6時発の長距離バスに乗る。ナンディに帰るのだ。もうろうとしていたが、持参した財布が空のため、飲まず食わずで、211キロの旅をする。ひたすら車窓から人びとを見る。

早朝のバスを利用して、市場で売るための手作りの箒を持ち込む老人あり、野菜を売るために乗る母親あり……、早朝出勤のリゾート施設の門に消える女性あり、交代で出てきた女性あり……。



左から、どこにでもいそうな若者風のティモティテ神父、清水、セイニ・ナボタ元議員、サロメ。

一期一会、スバでの出来事も、今日の風景も、人びとの動きも、フィジーの人びとのおおらかな温かさに包まれ、心も解き放たれ、癒された旅であった。

最後のフィジーの夜、伝統の樹種の森を復活させるため尽力しているシスター・ローラのプログラムに、「パプアの森を守る会」から200ドルを支援する。

11月10日(土)

ナンディ午前8時発のニューギニア航空機で出発する。ホニアラ経由ポートモレスビーへ。スムーズな旅を思いワクワクしたが……違った。途中のホニアラ空港では2時間も待たされたのだ。

「数名の方がまだ到着しておられないのです。待たなければならぬのです。」「何で待たなければならぬの?」。人びとは代わる代わるスタッフに聞きに行く。私も聞いた。

2時間後入ってきたその数名の人びとの顔をじっくり観察する。「ビジネスマンと政治家風だ。ことによるとAPEC(アジア太平洋経済協力)の関係者か?」(私のつぶやき)

この間ホニアラで若い女性が入ってきて私の隣の窓際に座った。フレッシュで初々しい女性。2時間待つ間、どちらからともなく話し始めた。その内容が面白かった。

「これから故郷の南京に休暇で帰るの」、「ホニアラでwoodを買う会社の事務をしているの。中国の南京のカレッジで一生懸命!!!勉強してこの仕事に応募したの」とさわやかに応える。

「今のこの会社は、ソロモン諸島からだけでなく、アフリカやパプアニューギニア、マレーシアからwoodを買っているの。送り先は中国、ベトナム、インドよ」

「ホニアラでの生活はどう?」

「持ち物を路上で奪われたりするので注意が必要よ。食べ物にはいろいろ苦労している」

持ち込んだ漢方ドリンクをしきりに飲む。

私に幼少時の自分の写真と、美人の母の写真をスマホから見せてくれた。こんなにさわやかな女性が、名だたる伐採企業に勤めている。もったいない。私はそのちぐはぐさに戸惑って、彼女を見つめた。

故郷のような パプアニューギニアに到着

ポートモレスビーに遅く着き、あたふたと国内線に乗り継ぎ、ニューアイルランド島ケビアン空港には夜に着く。帰省客が多く、空港はごった返している。出会ったブーゲンビル島出身の若い女性と、出迎える家族が修道院まで私を乗せていってくださる。

11月11日(日) ニューアイルランド島へ

1990年、1993年、2009年、2017年以来、5回目の訪問である。宿泊はマリスト会の修道院。日曜日をゆっくり過ごす。

やっとパプアニューギニアに着いたのだなあ感慨深い。ミサ後、ジュリアス・チャン知事(伐採推進派)の事務所で働いている若い女性秘書フェシタス・カクトルさん(ブーゲンビル島出身)と話をする。歯切れのいい受け答えと記憶力。女性が要の仕事をしている時代に入ったとの感がある。

今回はきびきびした若い女性と出会った旅だったなあ。それも伐採企業側の事務所関係だったとは……もったいないという思いがひとしきりする。

11月12日(月)

◎ニューアイルランド島南部の伐採地と 日本軍による虐殺の地

朝11時ケビアンを出発、夜11時修道院帰宅という長い一日であった。

教会のワゴン車で、ジョー神父と、カリタス関係のジョン・コニオリさん、運転手のマークさんの案内で出発する。ただし、車の修理からの出来上がりが11時だったので、大旅行には遅れた。

そのうえ、案内の3人は、説明したくてたまらない人たちだったし、私はといえば質問したくてたまらない人だったので、それは大変だった。

「ニューアイルランド島の表土は薄く、その下の石灰岩層は深い。マレーシア企業の伐採と、その跡のオイル・パーム・プランテーションは島をさらに痛めつけている。企業は化学肥料と殺虫剤を多使用している。働いている女性で肺ガンになる人が多い」

「カカオの実(チョコレート)の原料は、害虫にやられて今は生産量が落ちているのが残念であること」等々。

途中、家の前の道路に木の葉が敷き詰められていた。「あれは何?」「伝統の喪中の家のしきたりなのさ」という具合だった。

◎カセロク村のジョン・アイニさんとの再会 ニューハノーバー島の原生林を守りぬいた!

2017年の訪問時に最も印象に残ったジョン・アイニさん。クイラの苗を植えて人びとに配り、ニューハノーバー島の残された原生林を守るために、牢に入れられても闘いつづけた人。

今回、彼はニューハノーバー島の知事になっていた。でもかなりやつれてしまっている。

「ちょっと気管支炎で苦しんでいる」と言う。

彼はニューハノーバー島の知事としてさらに心血を注いで、ニューハノーバー島の原生林を守り抜いていた。「伐採企業を訴えたい地主たちが、私のところに相談に来る。今、そのために、書類づくりに忙しくて……。まるで弁護士のかわりにやっているようだが」と言う。



ジョン・アイニさん

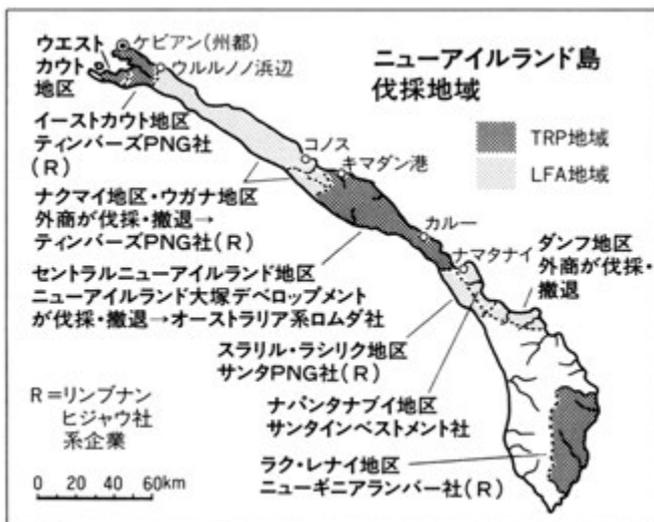
そのかわりクイラの苗を育てる余裕がなくなったそうだが……。

森を守りつづける、この道一筋の彼を見て、今後も応援をつづける約束をした。

私たちの車は、さらに南へ。伐採の原木積み出し現場をいくつか通過する。

奥地が伐採されていない森の川の、清らかさ、豊かさには目をみはるものがあった。

やがて交通の要所ナマタナイに着く。その奥地のピレ村で日が暮れるまでインタビューをした。



▲1994年当時の伐採状況(『日本が消したパプアニューギニアの森』明石書店より)





伐採した原木の積み出し現場

◎日本軍による強姦と虐殺の村々

戦争のとき、ニューアイルランド島は、ラバウル湾を隔てた後背であるがゆえに、ここで繰り広げられた日本軍による壮絶な虐殺・強姦などほとんど知らされないまま今に至る。女たちを兵営に集めての強姦、反対する家族への拷問と殺害など。『森と魚と激戦地』北斗出版にも記した。

今回は、その聞き取りのさらなる追加を、記憶力抜群の生き証人、ベロニカさん（78歳）から聞くことができた。

「この地域で起こったことを伝える必要があるのだよ」という家族たち。その声に励まされて、ベロニカさんは語った。

ベロニカさんの父は隊長の“ヤマダ”に、兵隊のための大量のココナツ・オイルを持って行く係だった。120個のココナツの実を、削って絞って煮詰める作業



ピレ村のベロニカさん（78歳）



奥地が伐採されていない清らかな川

も重労働だったと言う。

ベロニカさんの父の兄は、日本兵による村人への殺戮の手助けをする係だった。それこそ、耐え難く悲惨な仕事だった。こうした侵略に住民による密かな抵抗の闘いもあった。そして日本軍からの仕返しの処刑の仕打ちなど。

「この川の上流のダハナ村に隊長“ヤマダ”の司令部があった。大勢の日本兵がいた。そこに女たちは強制連行され、兵隊たちに強姦された。反対する家族は首を切られたり拷問された。村人は耐え黙っていることがせめてものできることだった」と言う。

戦後ずっと教会の指導者であった彼女の語りははっきりとしており、被害にあった女性たちの名前と出身村までも、私のために書いてくださった。

「私は必ずこの話を日本の人びとに知らせます。話して下さって本当にありがとうございました。どうぞ私たちをお許しください」と私は一人ひとりに深く頭をさげて、夕暮れの村に別れを告げた。



ベロニカさんとその家族（ピレ村にて）



「この川の奥地が司令部だった」と指さすジョンさん

小さな村の大きな悲しみがいまでも残っている。この話を埋もれさせてはならない。そう私は心に誓った。この村々は激戦地であったばかりではない。戦後日本のブルドーザーが真っ先に、この島を伐採地に変えた。（この日の証言の詳細は今後の『森と魚と激戦地』に執筆する予定）

11月13日（火）

最後のお礼をこめて、車を提供してくださったロクス・タタマイ司教とゆっくり話をした。彼は元ジャーナリストだった。気候変動キャンペーンの欺瞞や、伐採企業の輸出の際の価格移転操作についても知っていて、「情報を送ってほしい」とくり返し頼まれた。

午後は女性グループとの話し合いの時を持った。海に見える丘の木陰で、苦しかったことも楽しく可笑しく語る彼女たち。それはニューアイルランド島の旅の締めくくりとして、素敵なひとときとなった。

リーダーのフィロメナさんは、「私の父は日本軍の船に、カヌーごと吊り上げられ、スパイ活動の自白をしろと責められたの。もちろん自白しなかった。本当はスパイ活動をしたのだけれど」。

「日本兵が女たちを連れ込んだ場所は、ラマコット西海岸にもあるのよ」と語る女性。

「母は、連れ込まれそうになったの。でも逃げて逃げ切ったの」と誇らしげな女性。

ケビアンに当時いた女性は、「地下いたるところに防空壕が掘られていた。今もその跡があるのよ」と語る。

踊りながら、歌いながら、女たちと私は忘れられない時を過ごした。

「教会では司教も、神父も、次々と入れ替わるでしょう？ でも実際の指導力をもっているのは、私たちなのよ」と元気に語る。

「そうですね」。私はもろ手をあげて拍手を送る。



元気いっぱいの女性たち（ケビアンにて）

11月14日（水）ラバウルへ

ケビアン空港を朝5時45分に出発して、30分後には湾を隔てたラバウルの中心地ココボに着陸する。この飛行場も日本軍がつくり、かつて日本のODAで改修されていた。

OLSH（Our Lady of Sacrate Heart）のシスター・テレサが迎えに来てくださった。やっと我が家に着いた！という安心感に包まれる。

あれこれ準備した後に、夕方便で着く倉川さんたちを出迎えに行く。

11月15日（木）

倉川・池田さんはラバウルが初めてなので、ポール神父が案内をしてくださった。

日本軍に毒薬を注射されて死んだピーター・トロトさんの記念教会も訪ねた。その殺害場面が教会のステンド・グラスとなっていた。



急に降り始めた雨が、不順な天気を予兆しているようで、ふとマラクル村行きの出発が気になる。実際に、嵐のボート旅行となったのだが、そのことを、まだ知らない私たちではあった。

以後のニューブリテン島紀行は、倉川さんの記事に詳細が記されている。

11月23日（金）ポートモレスビーにて

ニューブリテン島の旅を終えた私たちは、6時50分ラバウル発、8時過ぎに首都ポートモレスビーに着く。

「やれやれ、APECは終わっているし、もうその影響に巻き込まれることはないわ」と思ったのが早とちり!! なんとAPECの余波で、首都は大騒ぎではないか。ポリスの治安部隊自身が、国会議事堂へ侵入し、暴動を起した20日の事件の後だったからである。

ちょうど私たちが空港ビルに向かおうとしていると、皆に「とまれ」の合図があった。私たちの前を、その治安部隊の一部とおぼしき人びとが、待機中の飛行機に誘導されて行く。彼らは、「私たち何も悪いことをしていません」風に、胸を張って、大きな体格を揺すりながら堂々と機内に消えて行った。

この日は、プールのあるロッジの庭で、ジョン・シリゴイ弁護士と再び話をする。

ポール・パポロさん、ノベルト・パメスさん、その他の出会いをジョンさんに報告し、今後の連帯・裁判支援の具体化をわかちあった。皆で連帯して最後の原生林を守り抜こう。その誓いを新たにする。

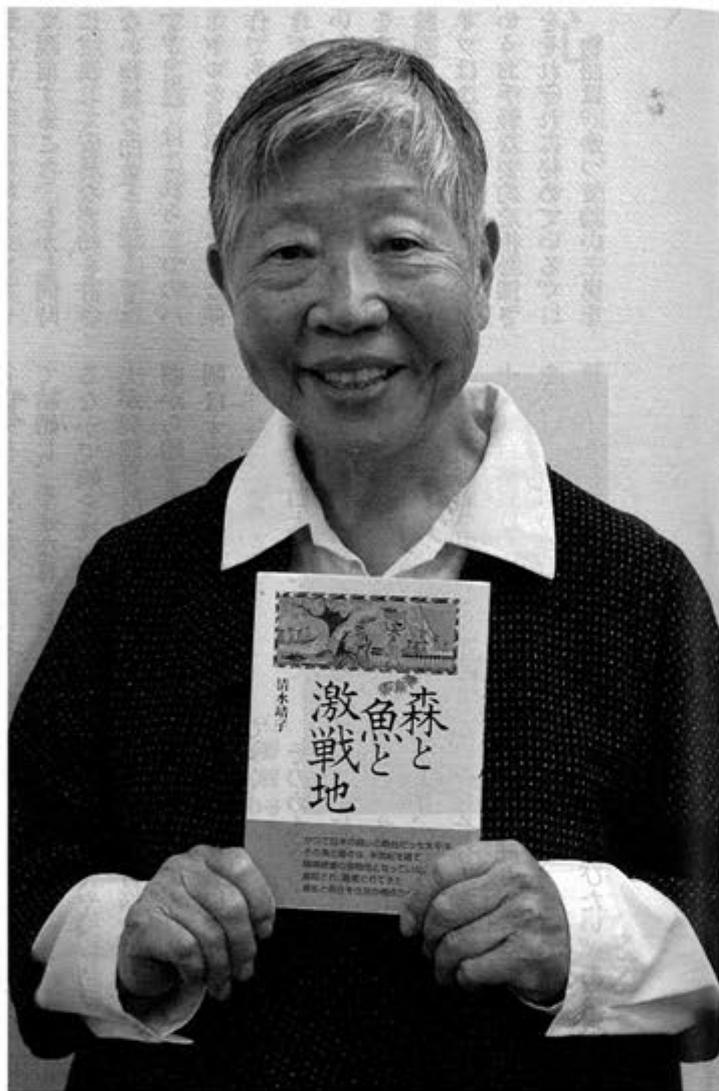


ジョン・シリゴイ弁護士と倉川、清水

11月24日（土）旅の最後に

成田へ向かう機内からの外を眺めながら、旅のすべての出来事と、出会った人びとへの感謝の思いを深くする。

APECの谷間の出来事、嵐も雨も、どの夕暮れも、どの道も、忘れえぬものとして、私の魂に刻まれるものとなった。



しみず やすこ/ヘリス・メルセス宣教修道女会の修道女として平和運動や熱帯林保全活動などに取り組む。「バプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会」メンバー。著書『森と魚と激戦地』は版元が解散したため、新たに別の出版社で新版を出そうと模索中、とのことだ。

今、何かしなければ一生後悔する。
 かけがえのないものを守りたい。
 その「促し」に答えて生きる

の歴史社会学部(当時)を修め、高校の社会科学教師として11年働いた。

1980年には、修道女会から現地の高校教師としてミクロネシアのグアム島に派遣される。赴任するやいなや、日本の原発から出た放射性廃棄物の海洋投棄計画に反対と怒りの声が湧き起こっているのを知る。

STOP!
 壊憲

「当時、日本ではまったく知らされていなかった計画でした。投棄予定海域はマリアナ諸島の北方。太平洋の島々からの反対を受けて、日本政府は慌てて説得団を派遣してきました。」

「日本は人口密度が高く、地震・火山活動による不安定な立地条件ゆえに核廃棄物を保管する場所がない。海洋投棄される核廃棄物はドラム缶に密封されており、人が抱きついても安全」と説明したのです。その説

明の矛盾とウソに、「安全ならなぜ東京湾に棄てないの?」と島民は一層の怒りを募らせました」

グアム島でも住民が抗議デモや署名集めを開始。清水さんも高校で教えながら参加した。さらに清水さんは「朝日新聞」の「論壇」に投稿。説得団のウソを日本に伝え、「海洋投棄」は白紙撤回を」と訴えた。

「かつて、グアム島をはじめ太平洋の島々に侵略した日本軍は、住民へ

の拷問や虐殺を繰り返してきました。私は「語られてこなかった」話、無数の「知らされてこなかった」話を住民から直接聞き、このことを歴史の闇に埋もれさせてはならないと、執筆を開始するようになりました」

戦後も日本は熱帯林伐採や遠洋漁業など、島々の暮らしや生態系を根こそぎ奪うようになる。

「昔戦車、今ブルドーザー」と言われた日本企業の実態も、日本ではほとんど知られていないままです」

清水さんは94年に「バプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会」を仲間たちと立ち上げ、住民との連帯と調査で今も現地を訪れる。

著書「日本が消したバプアニューギニアの森」(明石書店)、『森と魚と激戦地』(北斗出版)、そして先に挙げた本誌ルポ大賞応募作品などは、こうした背景から生まれた。

「幼い頃、私は三鷹村(当時)の雑木林を見て育ちました。夜になれば永劫の彼方から星空が降り、大地と森と宇宙の美しさに感動したことが、私の原点のように思えます」

雑木林が広がる武蔵野の原風景は後に多くが開発で失われる。しかし、清水さんの原点と祈りは、修道女会の解放の精神とともに、熱帯林保全や平和運動、脱原発運動に向かう自身の原動力となっている。

撮影・まとめ/斉藤田華(編集部)

週刊金曜日 2019.1.25 (1217号)

45

▲『週刊金曜日』2019年1月25日発行 1217号

ぶれない
あきらめない
おそれない

改憲阻止に熱帯林保全、脱原発も 不正義とたたかうシスター

清水靖子

「日本国憲法みんなの宝」軍事費やめて福祉に使う。年の瀬の週末の昼下がり、新宿駅西口（東京都新宿区）に歌声とコールが響く。

九条改憲の阻止を呼びかける街頭署名だが、参加者は「きよしこの夜」などの賛美歌を合唱。修道服姿の女性があちこちに見える。

実はこれ、カトリック教会のシスター（修道女）たちが呼びかけた「シスターズ・アクト 憲法にラブソングを！」だ。昨年4月に始まり、今度で4回目。当日の12月8日（土）は77年前、日本軍がマレー半島に侵攻し、米軍がハワイの真珠湾を攻撃した日でもある（ハワイ現地は12月7日）。

「憲法を守り、希望ある未来を子どもたちに手渡したい。日本は戦争で無数の命を奪い、また失った。私たちは二度と戦争の加害者にも被害者にもなつてはならないと決意して、平和憲法を大切にしてきました」

「シスターズ・アクト」のスピーチで、ベリス・メルセス宣教修道女会

のシスター、清水靖子さん（81歳）は平和憲法の意義を訴えた。清水さんは同行動の呼びかけ人の一人だ。

折りに導かれ路上へ

国会前のデモでも、僧侶やシスターたちの姿をしばしば見かける。

「カトリック教会は、イエスの福音にある『地上の正義と平和』の実現を大切にしてきました。一方で歴史の流れの中、戦争に加担したことも多々ありました。その反省と痛恨の思いから、『正義と平和』の促進を優先課題に、他宗教との連帯と多様なネットワークを展開しています」

「シスターズ・アクト」にも、仏教僧侶や神主らが参加している。

「安倍政権は国家を私物化し、ウソを重ね、さらに『戦争ができる国家』へと憲法改悪への道を進めるが、多くの人がそれに抵抗しています。私たちが今、何かしなかったら一生後悔すると思いました」

清水さんが属する修道女会のルーツは、13世紀のスペインにさかのぼ

る。「ムスリムに囚われたキリスト教徒の奴隷を解放するため、自分の生命を差し出してきたという初期の歴史があります。その精神を引き継いで、『奴隷の状態、不正義からの解放』に生きることが私たちの会の精神です」と清水さんはいう。

「今で言えば（中南米の貧困などを背景に登場した）『解放の神学』でしょう。母なる神とすべての生命への愛と、深い祈りから生まれた解放の精神。それを今も世界各地で、また日本で生きようとしています。そして私自身も、人生の歩みの中で、今それをしなかったら後悔する」という胸の奥からの神の霊の促しに応えながら、次の展望と関わりに出会うという連続だったように思えます。『いざ社会運動をやるぞ』と意気込むとは、違うような……」

ちなみに清水さんが本誌に登場するのは、今回が初めてではない。

第9回「週刊金曜日ルポルタージュ大賞」（2001年）に応募して、『日商岩井が汚染したマタネコ・ク



「シスターズ・アクト」でマイクを握る清水さん（左）。2018年12月8日、東京・新宿駅西口で。

リーク 熱帯雨林破壊と砒素汚染」を書き上げた。大手商社の日商岩井の現地子会社が、バプアニューギニアのニューブリテン島で、長年にわたって原生林伐採と丸太輸出で環境破壊をしながら、村の住民の飲み水である地下水と泉にヒ素を垂れ流し続けて汚染除去もしない無責任な操業の実態を明るみにしたものだ。

作品は報告文学賞に選ばれ、本誌363号（01年5月18日）で掲載。同357号（同3月30日）選評で本多勝一編集委員は「本来ならマスコミが市民運動と連帯してやるべき対象だ。私人は『大賞』に推しても」と高く評価している。

歴史の闇に光を当てる

清水さんは短大英文科を卒業後、民間企業に4年勤めてから修道女会へ。さらに会の薦めで聖心女子大学

森と日本の建築

辻垣正彦



日本基督教団和泉多摩川教会

この30年私は建築の設計を通じて、世界の森を守ることを考えてきました。日本の森は杉・檜の人工林が主であるから、ほど良い時期に伐採し、製材し、用材として使われなければ森が疲弊してしまいます。

一方パプアニューギニアの原生林は太古からの天然林であり、やたらに伐採してはいけない森なのです。しかし日本はその原木を輸入してきました。日本の木材自給率は、紙パルプも含めて30%です。70%が輸入されていることに激しい怒りを感じます。

日本の杉や檜の人工森は、伐採され用材として使わ



善福寺塔の家



居間食堂



東福寺邸（長野市）



カトリック浜松教会

れることの繰り返しで保たれてきたのです。その材を使うことが大切で、そのことがパプアニューギニアやソロモン諸島の原生林や、アメリカやロシアの原生林を守るのです。

私は自分の設計する建築に外材、合板、集成材、石油系建材を一切使いません。国産の無垢の木材を、大工の墨付け、手刻みで使用することを原則としています。

しかし建築業界を席卷しているのは、その反対です。ハウスメーカーの宣伝に乗った合板や集成材だらけの接着建築です。

私たちは、住まいの材の地産地消を真剣に考えなければなりません。日本は、伝統の歴史のなかで、住まいの材の植林木を大切に育ててきたまれな国です。一方で広葉樹の天然林も守ってきました。今はそのパターンが崩れてしまっています。

生態系の中の人間、その中で共に生かされ、生きていくこと。子どもたちに地球上の貴重な森を残していくこと。その生き方と智慧を皆で育てていこうではありませんか。

もう77歳になりましたが、このことを建築設計の中で主張しながら、もう少し仕事をしたいと思います。

カカオ栽培支援の検討を始めよう 原生林の村々からのカカオとして……

倉川秀明

マラクル村でルーライ集落のピーター・パヴォグさんやスティーブンさんなどたくさんの人々と話をしていた、よく話に出たのがカカオ栽培についてだった。

村人にとっては、自然を守り、自然とともに生きていくといっても、幼稚園や学校の授業料、教室や施設の増築や補修にも現金は必要だろう。村人たちは自分たちで工夫をしてカカオ栽培などいくつかの現金収入の方策を考えているが、なお支援を期待している。

そこで、私たちが村人の生活を支援することができるのか、それが適切なのか、かえって外部の人々に依存をもたらすことになりはしないかなどを検討する段階にきているのではないだろうか。

具体的には、このような課題がある。

1. カカオの苗を育てる、または購入する。
2. カカオの木を植え替える。
3. カカオ豆乾燥装置（カカオ・ビーンズ・ドライヤー、ココ・ドライヤー）を新しくする。
4. カカオ豆の運搬方法を改善する。
5. カカオ豆の販売ルートを開拓する。
6. カカオ栽培についての研修を受けて、栽培方法を確立する。

そのための前提として考えなければならないこととして、



スティーブンさんとカカオの木



カカオ豆の乾燥装置

1. カカオ豆を栽培している人々の意見が一致しているのか、全員が合意できるのか。
2. 各集落にリーダーないし活動の中心となるグループがあるのか、作ることができるのか。
3. 人々が自由に意見を交わせるような素地があるのか。

そして、私たちの会の今後の課題として考えられることは、

1. カカオを巡る現状と問題点の把握。
2. カカオ栽培についての研究。
3. フェアトレードの理念と方法についての研究。
4. カカオ栽培に関して、現地との連絡を密にする。
5. カカオ豆の収穫期に現地を訪問し、実際の問題点を把握する。

私たちは、村人の声に応じて、このような課題を検討していきたい。



ココナツを買う池田



ニューハノーバー島の原生林を守りきったジョン・アイニさんと清水



マラクル村奥地のルーライ集落のピーター・パヴォグさんと倉川

◎年会費・カンパ受付

郵便振替口座 東京00100-1-614216 パプアの森
2019年度(4月～3月) 3000円
よろしくお願いいたします。

◎DVD 調査報告の動画 1200円(送料込み)
を販売しております

ホームページ <http://www.pngforest.com/>

パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会
ニューズレター『太平洋の森から』第40号
発行：パプアニューギニアとソロモン諸島の
森を守る会

〒141-0031 東京都品川区西五反田8-10-14-206
辻垣建築設計事務所内 電話03-3492-4245